家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第六十七巻　第六号

お茶の水女子大学
昭和
43.5.21
図書館

6

日本幼稚園協会

フレーベル館保育図書新刊紹介

幼稚園教育入門

玉越三朗監修　東原岩男著　A5判192頁
定価550円

現場の保育者の実践記録をもとに、幼稚園教育の内容をわかりやすく紹介した書。幼児教育の基本的な考え方から実践記録のとり方まで広く参考となる貴重な入門書です。（著者はもと香川県教育委員会指導主事）

幼児教育概説

坂元彦太郎著　B6判256頁　定価500円

斯界の指導的立場にある著者が長年にわたる幼児教育者としての体験から、幼児の日常活動に焦点をあてて説いた教育論。幼児と保育者の日常を見つめ、保育者が見落としがちな幼児教育の本来あるべき姿を鋭くついています。

保育学年報（1967年版）

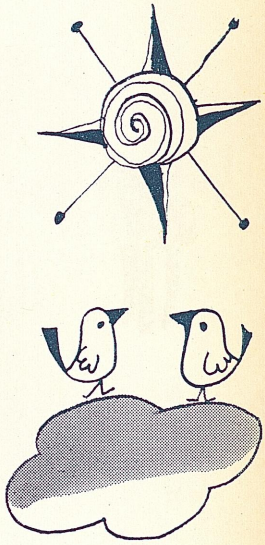
日本保育学会編　B5判256頁
定価2300円

保育および保育学に関するその年度の動きをもれなく集録。学会における研究発表・遊具・絵本などの幼児文化財・保育関係図書目録・保育行政の動きなど価値ある資料を満載。特集は、「保育所保育指針の実践的批判」です。

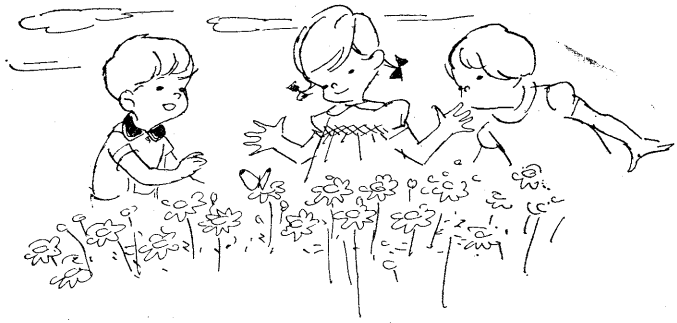
精神薄弱児教育の研究(2)

旭出学園教育研究所編　A5判224頁
定価500円

精薄児の身辺生活の自立と集団への参加、精薄児の作業教育の評価、数量観念の発達について、きりがみあそびの比較検討など――――幼児の段階での指導を考える上に非常な参考となる諸研究も収載されています。



株式会社フレーベル館



幼児の教育　目次

——第六十七巻　六月号——

表紙　小坂しげる

「遊戯」考——下——
自由遊びについて……坂元彦太郎…(2)
幼稚園の一週間……お茶の水女子大学附属幼稚園
三歳児・入園当初の一週間……村井トミ…(11)
三歳児のある一週間の記録……村石京子…(18)
四歳児・四月の一週間……関治子…(24)
四歳児・十月第一週の実践記録……村田修子…(31)
五歳児・平凡な一週間……堀合文子…(37)
五歳児の生活・ある一週間……守永英子…(42)

保育の過程(二)……津守真…(50)

五歳児の記録⑫—二学期……磯部景子…(59)
幼稚園の問題いろいろ(2)……(70)

「遊戯」考 ―下―

――自由遊びについて――

坂元彦太郎

〈1〉

わが国で、公式の文書に「自由遊び」に当たることばが使いはじめられたのが、明治三十二年の「幼稚園保育及設備規定」である。その第六条に

幼児保育の項目は遊嬉、唱歌、談話及手技トシ左ノ事項ニ依ルベシ

一、遊嬉　遊嬉ハ随意遊嬉、共同遊嬉ノ二トシ、随意遊嬉ハ幼児ヲシテ各自ニ運動セシメ、共同遊嬉ハ歌曲ニ合ヘル諸種ノ運動等ヲナサシメ心情ヲ快活ニシテ身体ヲ健全ナラシム

（二以下省略）

これは、ほとんどそのまま、明治三十三年改正の小学校令施行規則に引きつがれているのである。わが国では勅令でもって教育のことをきめることが確立して以来、この年の小学校令の改正に当たって、はじめて、その施行規則にさまざまな規定が幼稚園について設けられたのであるが、その中にこのように保育項目があげられたのである。

すなわち、遊戯には二種類あって「随意遊嬉」は、「幼児ヲシテ各自ニ運動セシメ……心情ヲ快活ニシテ身体ヲ健全ナラシム」るものであるとしているのである。

しかし、明治四十四年の小学校令改正のときには、いわゆる保育項目の四つをあげるだけにとどめて、「左ノ事項」以下の文章を削ってしまっている。また、大正十五年の幼稚園令では、保育項目に観察を加えただけであった。しかし、遊戯とい

う項目がいちばんはじめにあげられていたのには、変わりはない。

いまひとつ、国が示した文書の中で、「自由遊び」のことをあげているのが、昭和二十三年の保育要領である。「これを参考として、各幼稚園でその実情に即して教育を計画し実施していく手びきとなる」ものであって、その「六、幼児の保育内容—楽しい幼児の経験」の4に、「自由遊び」という項が設けられている。

「子供たちの自発的な意志にもとづいて、自由にいろいろの遊具や、おもちゃを使って生き生きと選ばれる遊びが自由遊びである。

そこでは活ぱつな遊びのうちに自然にいろいろの経験が積まれ、話し合いによって観察も深められ、くふうや創造が営まれる。また自分の意志によって好きな遊びを選択し、自分で責任を持って行動することを学ぶ。子供どうしの自由な話し合いからは、友愛と協力が生まれる」

その外、「五、幼児の一日の生活」のうちの「幼稚園の一日」という項の中にも、しばしば顔を出している。

この、明治三十三年の施行規則の規定と、戦後の保育要領の記述とが、自由遊びないしは随意遊戯についての公けのきまりの二つの頂点であって、この小論においては、前者より後者にいたるまでの経緯を明らかにしてみようとしているのである。

現行の幼稚園教育要領には、自由遊びとか、一斉指導とかいうことばは見られなくなっている。しかし、幼児が自分で選ぶ活動などという表現で、そのような精神が受けつがれているのはいうまでもない。幼児の活動そのものの性格や、さまざまな条件によって、自由に個別的に、小グループで営むこともあるし、教師の一斉の指導にはいることもあるのだ、という考えがもとになっていて、特別に自由遊びという遊びの種類があるわけでも、この遊びとこの遊びとだけで自由遊びが行なわれるという限定もしないのである。幼児の自由な遊びを尊重するという考えで一貫しているのである。

〈2〉

明治三十三年の小学校令施行規則にこのような規定が現われる前後はどういう事態であったであろうか。一般的にいって、こういう規定がされるには、そうあるだけのことができているからであり、またこれがスタートとなってその方向への歩みがつづけられるものである。しかし、いま少し、実際の資料によって、「自由遊び」の系譜をたどってみよう。

関信三訳「幼稚園記」（明治九年）や、東京女子師範学校附属幼稚園の最初の保育課目には、はっきりしたことは出ていない。しかし同附属の明治十四年の保育課目の改正に当たって、「保育の要旨」が述べられているが、その中に次のような文がある。

「……幼児ノ室外ニ出テ随意ニ遊嬉スルトキハ己ノ意ヲ逞ウシ禀性ノ倫倚セル所ヲ現ス者ナレバ此際最注意ヲ加ヘテ各児ノ性質ヲ視察匡正スベシ。……幼児ノ成育ノタメニハ室外ノ遊ヲ最緊要ナリトス……」

そして、保育課目の一番最後に「遊戯」があげられ、「遊戯ハ幼児ニ適スルモノヲ選テコレヲナサシメ以テ身体ヲ健カニシ精神ヲ爽カナラシメンコトヲ要ス」とされた。「遊戯」の時間は一日に必ず一回はあって、主として戸外の遊びが重んじられていたようである。そのありさまは、武村耕靄女史が、女子高等師範学校附属幼稚園の実景を描いた掛軸（明治二十三年日本美術協会秋季展覧会に入選、現在お茶の水女子大学所蔵）でうかがうことができる。談話(修身)、恩物、唱歌とならんで幼児が屋外でさまざまな遊びをしているところが描かれている。

ここに、明治二十四年三月に定められた、「女子高等師範学校附属幼稚園規則」がのっている同園一覧のパンフレットがある。その規則の第二条は次のようである。

附属幼稚園ノ保育課目は、説話、行儀、手技、唱歌、遊嬉トス

この一覧は、明治二十六年末に作られたもので、二十五年にはじまった分室についての記録をものせている。

その「保育の旨趣」を述べている末段に次のような文があり、そして、各組保育時間配当表がのせてある。

「以上ノ旨趣ニ因リ日々保育時数ノ大半ヲ以テ戸外遊嬉ニ充テ幼児ヲシテ庭園ニ於テ自由ニ運動セシメ或ハ規則正シキ遊嬉

毎週保育時間配当表

	一ノ組	二ノ組	三ノ組	四ノ組	五ノ組	分室
	時分					
説話	一、四〇	一、四〇	一、三〇	一、	一、	二、
手技	三、五〇	三、三〇	二、三〇	二、	二、	二、
唱歌	二、	二、	一、三五	一、一五	一、一五	一、五〇
戸内遊嬉	二、三〇	二、三〇	一、四五	一、四〇	一、四〇	二、
戸外遊嬉	一三、四〇	一三、一〇	一五、五〇	一六、四五	一六、四五	三三、三〇
会集	、四〇	、四〇	、四〇	、四〇	、四〇	
食事	一、四〇	一、四〇	一、四〇	一、四〇	一、四〇	一、四〇
計	三五、	三五、	三五、	三五、	三五、	三三、

ヲ課シ又常ニ衛生上ニ留意シ以テ身体ノ発育ヲ謀リ何ノ時間ノ処ニ於テモ保姆ハ終始幼児ヲ観察シテ各自ノ性質ヲ弁知シ其長ヲ伸ハシ短ヲ補ヒ……」

さらに、「保育課細目」として、各課目について説明を加えているが、遊嬉については次のように述べている。

「遊戯ハ之ヲ戸外戸内ノ二様ニ分チ尚ホ二様何レモ幼児ノ随意ト保姆ノ指揮ニ由ルモノトノ二種トス戸外ニテ一同ニ遊バシムルトキハ競争旗取鬼遊球技等ヲナサシメ戸内ニテハ遊嬉ノ難易ニ応ジテ凡ソ所定ノ順序ニ従ヒテ之ヲ授ケ楽器ヲ用ヰテ之ヲ行フ何レモ時間ハ一定セス唯室内遊嬉ハ殆ト毎日一回之ヲ課シ一回ノ時間ヲ凡ソ三十分トス」

また、附録にある「分室」の報告の中で、保育細目として遊嬉について次のように述べてある。

「規律アルモノト然ラサルモノトノ二種ヲ課ス規律アルモノハ唱歌ニ従ヒテ運動シ或ハ其方法一定セルモノニシテ規律ナキモノハ即チ自由遊ニシテ多クハ戸外ニ於テス」

以上は、お茶の水の附属幼稚園に関することではあったが、その頃はこの幼稚園からの影響がひじょうにつよかったし、残っている資料によっても、大体これに似た状況が多くの幼稚園にあった、といえるであろう。これが大体、明治二十年代から三十年代のはじめの実情であって、すでに「自由遊」ということばさえ使われていたようである。ただ、保育時間の半分以上も、随意の戸外遊戯に当てているほどのところは、少数であったかも知れない。

〈3〉

このような動向にあった幼児教育の実情をもととして、明治三十二年、三十三年の規定ができあがったものであることはまちがいのないところであろう。すでに、随意の遊戯ということばが使われだしていて、それを尊重することがたいせつであるという考え方が、そのまま、この規定に現われたもので、遊戯をいちばん先にあげることなども、このときからはじまったといってもいい。

これから以後しばらくの間、ほとんど全国的に、これに則ったそれぞれの幼稚園に於ける保育の要項が定められ、各項目についての時間配当や、それぞれの園の日課表までが定められるのが普通であった。

ここに、当時の女子高等師範学校附属幼稚園保育要項（明治三十四年制定）から、関係の部分を引用してみよう。第一組織、第二保育の方針、第三保育の方法を述べてきて、その中

に、

保育ノ方法トシテ当園ニ採用スル事項ヲ遊戯唱歌談話手技トシ各事項ニ配当スル一日中時間ノ割合ハ左ノ如シ

一遊嬉　　凡そ三時間

一唱歌談話手技　　凡そ一時間

第四保育事項の冒頭に遊戯のことが述べてある。

遊戯ヲ利用シテ教育スルハ幼稚園ノ本旨ナルヲ以テ遊嬉ハ保育事項中最モ重要ナル項目ニシテ身体ノ健全ナル発達ヲ助長シ且ツ其心情ヲ快豁ナラシメ共同和楽ノ精神ヲ養フヲ以テ要旨トス

遊嬉ハ随意遊嬉及共同遊嬉ノ二ニ区別ス

随意遊嬉ハ危険害悪等ヲ誘致スル恐アルモノヲ除ク外ナルベク幼児ヲシテ任意ニ遊楽セシムルモノニシテ主トシテ自然ノ良性ヲ発達セシム

随意遊嬉ヲナサシムルニ当リテハ専ラ左ノ事項ニ注意スルモノトス

1　遊嬉ノ種類ニ注意シテ幼児ノ身体ヲ損シ品性ヲ害スルガ如キモノヲ避ケシムルコト

2　成ルベク幼児ヲ指導シテ任意活発ニ遊楽セシムルコト

3　他人ヲ妨害凌駕シ物件ヲ破壊汚損スル等ノ行為ナカラシメ且ツ自己ノ使用セシ物品ハナルベク自ラ処理スル習慣ヲ得シムルコト

このようにして、一般にもこうした方針を体してさまざまな実際が展開されたのであるが、ここにそれに対する学者の意見をみてみよう。

明治三十五年九月号の「婦人と子供」（「幼児の教育」の前身）において、女子高等師範教授であった東基吉は、「現今の幼稚園保育法について」次のように論じている。

「……随意遊戯とは幼児をして各自随意的に、自然的に、或は保育室に於て、或は運動場に於て、思い思いに悠々遊楽せしむるものをいふ」共同遊戯は、ともすると自発的な表出に欠けたるものになりやすいことを更に述べ、「是に於て此時代における幼児遊戯の真正の価値は、寧ろ反って彼等の随意遊戯に於て多く存するを見るなり」しかし、この場合「幼児の遊戯上必要なる凡ての自然的需要を以て具備せられたる園地の設あることを豫量せざるべからず。此如き園地は幼稚園に於て、最も欠くべからざる要素にして、風琴の如き、洋琴の如き、机腰掛の如き黒板の如き、要は即要なりといふを得べけんも、到底欠くべからざる要素にはあらず。広濶なる遊戯場の一方には、自

然の樹木鬱そうとして、夏は則天の炎熱を覆ひて緑陰深き辺、清流のそうそうとして掬すべきあり、春は即ち四辺の草花は自然の錦を織りなせるあり……一言すれば凡そ出来うべき丈けの自然地理的現象の具備せられたる、此の如き遊戯場こそ必要欠くべからざる要素なれ。……自然の恩物は限りなく彼等に供せられ意のままに此処に弄ぶことを許さる、此の如くにしてこそ、彼等は真に自然の子として恩恵に浴するを得べく、此の如き境界に於ける所謂随意遊戯の価値はまた何人も否むこと能はざるべし。

此の如き見解を以て現今幼稚園の多数を見んか、殆んど猫の額もただならざる空地に無数の幼児を逐ひ込み、或は全く空地を有せずして形ばかりの教場用具を備へ、……幽暗不潔の一室に彼等を幽閉し、放縦、喧噪、乱暴狼藉は之れ一任し、而して敢て随意遊戯の時間なりといふ。滑稽の度を過ぎて吾は寧ろ幼児の為に哭せんと欲す」

その当時、女高師助教授であったところの和田実は、「婦人と子ども」明治四十四年二月号の「保育法改良上の要点」で、次のように指摘している。

「……東京の中央に於ける様な設備の不完全なる所では其随意遊戯中に行ふ所の遊戯としては唯僅に二、三種に止まるものが多い。吾人の認むる所では幼児の遊戯の種類は少くも十種を降らざる可きである。

……そこで我輩の改良案としては保姆が凡ての幼児を同時に、一斉に同一の遊戯を以て遊ばしむる一斉保育と、幼児各個の自由に任せて三々五々其好む所に趣かしむる各個保育即ち随意遊戯の時との何れを問わず、ともに我輩の所謂十種の遊戯を行い得る設備を整ふるを以て幼稚園当然の施設とする様にしたいのである。豆細工や折り紙は保育室に於て机腰掛に依りたる時のみに行わないでも子供の自由に遊んで居る時に好むものにさして決して悪いことはないと思う。否、吾人は斯くするのが最も自然的で教育的である様に思ふのである。子供がしたいと思ふ其時をはづさずに粘土細工でも唱歌でも鬼ごっこでもしてやるが善からうと思う。斯くするときは一斉保育の際に行ふ可きすべての遊戯は同様に随意遊戯に於て凡て之を繰返すことが出来る。若し是が十分に出来るならば全然一斉保育を廃しても決して差支えないと思ふ。

元来一斉保育は小学校の教授を模倣したもので、衆児を同時に同一の事に従はしむる為に保姆の手数と労力を省き得ると云ふことを便利として発達したもので、もともと人為の事であるから幼児各個の行動を制限し多少の無理を行って居ることは実

際止むを得ぬ次第である。

故に完全なる幼児教育といふ点から見れば決して貴ぶべき筋のものではない。吾人は若し各人の主張する如く其随意遊戯を生きたる保育場とするものがあるならば、今日に於て一斉保育を全廃しても決して差支えないと思ふのである……」

当時女高師附属幼稚園主事であった、中村五六は、その著「保育法」（明治三十九年）では、こう述べている。

「遊戯には広狭二様の意義あり。幼稚園教育の方法は凡て遊嬉なれども、茲に挙ぐるは狭義にて談話唱歌手技以外のものなり。……」として、遊戯の意義や、効果や形式から見た種類について述べていて、「遊嬉を授くるに当りて注意すべきは幼児随意の遊嬉にありては幼児の身体諸他の器物を損害せざる限りは幼児を活発ならしめんことを期し随意に遊ばしむべし。但し他を防害する如きは之を止め又己れの使用せる器物は自ら之を始末せしむべし」といったことを書いている。

〈4〉

しかし、前にも述べた通り、明治四十四年の小学校令の改正の際には、四つの保育項目だけをあげて、「左ノ事項」以下の説明を省いてしまったのである。この改正に当たって文部省は次のように説明している。

「……幼稚園ニオケル保育事項等ヲ小学校ニ於ケル教則其ノ他ノ如ク劃一ニ規定スルハ却テ保育ノ進歩発達ヲ促ス所ニアラザルノミナラズ往々ニシテ保育ノ本旨ヲ誤ルノ虞ナキヲ保セズ、又従来ノ如ク保育時数ヲ制限スルノハ実際上不便ナルヲ以テ適宜之ヲ伸縮スルヲ得シムルノ要アリ……」

したがって、随意遊戯、共同遊戯の別などの項も、他の項目の説明とともに省かれてしまったのであるが、同時に、保育時数の制限などの項目も省かれてしまったのである。要は、こうしたことはなるべく国で定めることはせずに、もっと学問的に経験的に研究を重ねたり、実情に合ったりするようなことができるようにしたのである。

しかしながら、随意遊戯と共同遊戯の区別に関しては、それがまちがっていたから取消しになったというわけではなく、事実上、多くの人はこの文句がそのまま施行規則にあるかのごとくふるまったようである。そして、大正十五年の幼稚園令のときもこの点はつづいたのであるが、やはりこうしたことがつづいていたといっていい。

ただし、大正になると、随意遊戯の代わりに自由遊戯ということばが使われるようになったのであるが、いつどこでそうい

いはじめたかは私にはわからない。また、昭和になると主として自由遊びということばが使われるようになるが、自由遊戯と文章に書いたり形式ばっていう人も、口では自由遊びといっていたのではないかと思われる。

「幼稚園の理論及実際」（大正十三年刊）で森川正雄（当時、奈良女高師教授附属幼稚園主事）は、遊戯一般について理論的な説明を行なったのち、「遊戯に関する注意」の第一番に、次のように書いている。

「自由遊戯の場合には専ら幼児の自己活動、自己選択を重んじ快活自由に遊ばせるがよい。尤も、危険は厳重に予防せねばならぬが、なるべく干渉を加えないがよい。

幼児各個の身体各部分の発育の状況、又家庭に於ける生活の相違、通園距離の遠近というようなことから、幼児の時々の運動の要求に相違があり、疲労の状況にも差違があるから、かかる場合に、幼児の自由に任ずれば夫々の自然的必要に応じた最も適当な運動をすることが出来る」

大正十五年に幼稚園令が発布せられ、保育項目は、遊戯、唱歌、観察、談話、手技等とされたのである。そして、明治四十四年の改正と同じく、それについての細目は全く付けられていなかったのであるが、やはり、遊戯を自由遊戯と共同遊戯とに分けて考える習慣はつづいていた。

その一例として、木下一雄の文をあげよう。当時、東京府女子師範学校附属幼稚園主事であった木下一雄著「実際的保育学」（昭和五年）には、「幼稚園の遊戯は普通自由遊戯と共同遊戯とに分つ、自由遊戯は保姆監督の下に各自自由に活動せしめるものであって、個性の発揮、長所の助成をなすに便なるので、指導によっては絶大の価値を存するものである……」

そして、一週間における配当時間数の一例として次のような場合をあげている。

観察	不定
唱歌	3
遊戯	6
談話	3
手技	6
自由遊戯	15
保健	不定
園外保育	不定

このような自由遊びを重視する人たちとならんでさまざまな理由から、一斉的な指導を保育の中心と考える人たちが少なくなかったことはいうまでもない。自由遊びを強調した人たちの先頭にあった、倉橋惣三は、当時主事であった東京女子高等師範学校附属幼稚園の「系統的保育案の実際」（昭和十年）の中で、次のように書いている。

自由遊びの例として
砂場遊びブランコ滑台其他遊具遊び園芸散策

「幼児の生活は、先ず、その自由遊びに於て活躍する。幼稚園保育の基底を自由遊びに置くのはこのためである。自由遊びは、保育の中休みたるものでないのは素より、また、保育の一部分たるに止まるものでもない。どこまでも保育の基底である。従って自由遊びを十分に発揮せしめ、その豊富にして且つ発溂たる遊戯態度の上に、一切の保育の計画が築かれるのである。」（倉橋惣三選集第四巻）

さらに、倉橋は翌昭和十一年夏の日本幼稚園協会主催の講習会の講演の中で次のように述べている。

「……自由遊戯という事で保育案の全部を立てようとはしませんけれども、自由遊戯というものが保育案の重要なる一部、殊に基礎的部分に取り入れられることはこれは認めなくてはならないと思うのであります。この点について、一般の保育案におきましては、保育案といえば自由遊戯というものは外に出されている。……われわれは自由遊戯一点張りで行こうとはしませんが、保育案の中に是非これを入れなくてはならないということが一つの主張であります。即ち新しく考慮せらるべき保育案では保育案と自由遊戯というものが別個のものでないようにする建前が是非採用せらるべきものと思うのであります。

……自由といったって子供が幼稚園の中でします自由遊戯というものは、およそ大体は定まっているものじゃないか。そうしたらそれを十分に先生が心得ておくということは出来ることです。……もし保育案全体が用意といったような意味であるとするならば、子供の自由遊びに対しておよそ見当をつけておくということも、これも用意という意味において保育案の性質を帯びてくるものではないかと思うのであります……」（倉橋惣三選集第四巻）

このようなことが唱えられているうちに、昭和十五年ごろからは軍国的な色彩がつよくなってきた。倉橋もまたそうした理論的変貌を余儀なくせられたが、園の実際においては、基本的な変更はなかったといっていい。そのうちに、戦争は激化し、遂に終戦を迎えたのであるが、新しい幼稚園教育の基本としてたてられた保育要領に、いままで述べてきたような系譜の流れが、そのまま結実した、といってもいいのではなかろうか。保育要領の行き方は、戦後新たに取り入れられたものではなくて、こうした長い歴史をもった系図を受けた、本来の血統の開花であることを見逃してはならないであろう。そして、再び、この頂点がもととなって、幼稚園教育要領も生まれているのであるが、この関係については、また別の機会を待って私見を述べることにしたい。

幼稚園の一週間

三歳児 入園当初の一週間

村井トミ

お茶の水女子大学附属幼稚園

昨年三歳児を受けもってから、もう一年が過ぎた。はじめはヒヨコのようにヨタヨタとした感じのあの子どもたちが、最近ではすっかり幼稚園を我が天下として活躍している。ここに一週間の記録をのせるに当たって日記をくってみると、当時のさまざまのことが、ひとつひとつ昨日のようによみがえって、しばらく楽しい追憶の世界にひたらせてくれた。楽しかったことも、かわいらしかったこと、困ったこと、手こずらされたことも、みんな今ではほほえましく懐しい気持でいっぱいである。

一年の中のどの一週間をえらぼうかと思ったが、三歳児なので入園当初の一週間の記録をのせることにする。

入園当初の一週間は子どももよそゆきのところがあるとみえ、あまり困ったこともなく過ぎる。むしろ二週目の終り頃から三週目にかけて、いろいろの問題が起こってくることが多い。この年の日記にしても類にたがわずであった。

昭和四十二年　四月八日（土）入園式

九時前頃から母親につれられて、かわいい顔が見えだした。今日は親がいっしょについているのであまり心配はなさそうである。三月に保護者と担任との会を開いているので、お母さんたち自身が、どこか安定した気持で子どもたちを連れてくるのかもしれないし、こちらも初対面でないことが気持にゆとりをもたせてくれる。

但し子どもたちとは、はじめてのお見合である。三歳児の先生にふさわしく、にこにこと優しく、やわらかい雰囲気で子どもたちを受けとめることにつとめる。先ず子どもたちにとって大好きな先生とならねばならない。遊具もとりつき易いように、心してあちらこちらに散らしておく。事前に家庭調査書をよく見てお

き、その子どもの性格や特徴を知っておくのが、役に立つこともある。親を離れないのはK子とLの二人。K子は母がちょっとでも離れると泣く。

◉自分の持物の置場所を覚える

字はよめないと思うので靴箱などあちらこちらの置場に、ひとりひとりにチューリップや兎、自動車など小さいかわいいマークを考えてはっておいたので、思ったより簡単に覚えたようだ。M子など、靴箱も帽子かけ、手ぬぐいかけも、お弁当棚も……どこにも自分のマークのかわいい赤いリンゴがはってあるのを知って、かわいい顔を更ににっこりさせたのも印象的であった。

◉入園式

ゆうぎ室に入る。子どもたちは親から離れて前列の椅子に腰かける。K子だけ後の保護者席で母にしっかりとくっついている。Lはよく離れたものだと感心したが下を向いたきりで全く顔をあげない。よくも長く続くものである。Lは私の手をしっかりと握ったきり一時もはなしてくれない。ひとりひとり名前を呼ばれて返事をしたり、手をあげたり、しらん顔をしたり、いろいろである。園長先生のお話も短くて、子どもにとってはありがたい。つづいて人形劇の動物たちが順々に舞台に登場して子どもたちに一言ずつ挨拶をする。兎は耳をふりふり、狸は大きなお腹をたたき、豚は大きい鼻をブーブー鳴らし、狼はノソノソ。さっきまで下を向いたきりのLの顔が次第に上がってきて遂に普通の状態になった。ほっとする。次に五歳児が歌をうたってくれる。みんなの知っているチューリップや靴が鳴るである。これで式は終わった、紅白のおまんじゅうをもらい、うれしそうだ。

◉入園写真をとる

庭の桜の木をバックにして親子そろって写真をとる。写真がすんだので部屋にひきあげると一人たりない。今いたはずなのに必死に探してみると、いつのまにか次の四歳児の仲間になって、すましてもう一度写真をとろうとしているKであった。思わず笑ってしまったが前の一瞬はひやりとした。

この第一日目の子どもたちの印象を一言ずつ記録したのを、一年たった今頃よんでみるとおもしろい。二、三あげてみよう。

I　よくしゃべり、調子にのりそう。

T　力づよくわんぱくらしい。ちょっと押してもまわりの者がころぶ。

M子　日本人形のよう。おとなしく落ちついている。

L　おむつがとれたばかりの感じ。先生独占型。

Y子　一人前にどんどんあそべそう。その反面甘ちゃん。

H子　ハイと返事がとてもよい。きちんとしておとなしそう。

（ネコかぶっていたらしい）

〝おいしそうなごちそうね〟とお客さまになる。ぞろぞろとお客さまがふえる

四月十日（月）雨

◉付添いをはなれてたのしくあそぶ

今日よりいよいよ付添いをはなれるので大変だと覚悟している。入園前の会で、付添いを一刻も早く離れることが子どものために幸であることをよく話しておいたので、思ったより渡し方、受け取り方がスムーズにいった。トラックや豆自動車、汽車、人形、ままごと、積木などよろこびそうなところへ誘う。汽車にしても、きちんと箱に入れておくより、二つ三つ連ねておくとか、つみ木もいくつかつみかけてまわりにこぼしておく方が、子どもたちにとっては、はいり易いようだ。問題はK子とLだが、二人ともはじめは母も部屋に入り親子いっしょに遊び、いつの間にか自然に戸の外へ、廊下へ、玄関へと姿をくらましてくれたので、どちらも泣かずにすんだ。こんなにもこちらの話を守ってくれた二人の親に感謝したい気持だった。

雨のために室内だけであそんだことが、かえって全体のまとまりがあってよかったかもしれない。でも一刻でもつまらない時間ができないように、こちらも気をくばって絶えず言葉をかけたり、仲間にさそったり、なかなか忙しい。ままごとでは御馳走つくり、アイロンかけ、うば車を押したり、傘をさして歩いたり……、動物を汽車にのせて引っぱったり、トラックに荷物をつんだりおろしたり、長いブロックをつなげて自動車にガソリンを入れ

うば車で赤ちゃんのお守り、左はおまわりさん

たり、組木を組んだり、指人形をはめて先生と話をしたり、一〇時三〇分までの第一日を無事終了した。みんな満足げだったのでうれしかった。帰りは長く一列にならんで、汽車になって玄関まで行き、一人ずつ親に渡すのだが、今日などは上手にならべる。Tが手足をバタバタさせて奇声を発し、一時はみなも真似をしたが、すぐにおさまった。

この日の記録の最後に次のようなことが書いてあった。

・とにかく親をはなれて泣かずにあそぶ。

・おもちゃのかたづけなどよく手伝ってくれる。

・手を洗っても水をはね返さない。

・列をつくっても、とび出したり、追いかけてつかまえたりしないですむ。

三年前のこの頃を思うと、現代なのか？とおどろく。（後日、けっこう水いたずらも始めたが…）

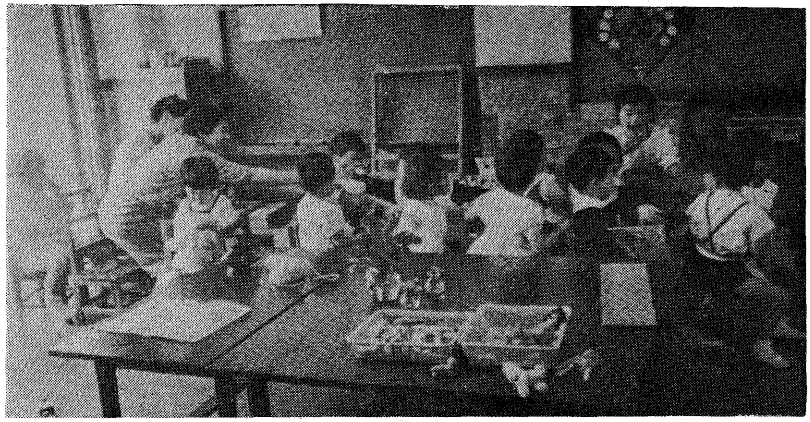
四月十一日（火）

◉室内のおもちゃでたのしくあそぶ

LとK子が朝ちょっとだけ母にいてもらったがあとは無事である。昨日のあそびをよろこんでする。女の子は断然ままごとが中心である。男の子はブロックや汽車のようなものが多い。どうやら幼稚園も好きになれそうだし、先生も好きになってもらえそうだ。K子もなれにくく、無口だが、あそびに入ってしまえば懸命に洋服のきせ替えなどしている。I、Kの二人はウルトラマンになって室内を走りまわる。SはLといっしょに小さい積木をつんでは地震だとこわすのがおもしろいらしいが、ちょっと気をゆるすとシーンとする。そして案外重い体で先生の膝にのったり、よりかかったりして甘える気分十分である。

◉紙芝居をみる（蛙のブカブカ靴）

赤いかわいい長靴をそまつにしておいたので蛙にはかれて困っ



汽車にのってお出かけ――
先生を中心にあそびが発展する

たという筋。先生の前に椅子を半円形にならべてよろこんで見る。Tは話の途中で、それから？それから？と伴奏を入れるので友だちにうるさがられる。

◉歌をうたう

「靴が鳴る」を手を叩きながらうたう。Lひとり手を出さなかったが誘導の甲斐あって途中からやり出した。H子は急に一人立ち上がって、「私、うたいます」といって大きい声ではっきりうたったのには、こちらの方が驚かされた。

◉五歳児より首かざりをいただく

小さい先輩に一人ずつ首に花の首かざりをかけてもらう。うれしそうだ。

四月十二日（水）

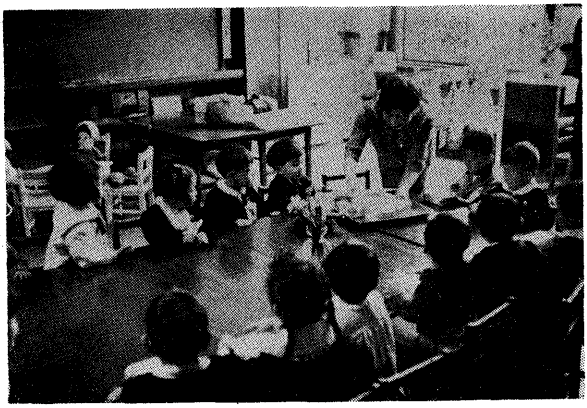
毎日うすら寒い日がつづく。戸外に出られないのが、今のところかえってまとまってよいかもしれない。K子、Lも一日毎に付添いをはなれ易くなってきた。

◉いろいろのおもちゃであそぶ

昨日のあそびをまたたのしむという感じ。Lのおもちゃの種類もふえてきた。M子はマジックをひとりでもち出して黒板に書いてしまう。紙にかかせようとしてもなかなかきかない。意志が強く、やろうとしたことは、とにかくやるつもりらしい。きれいな色チョークに切りかえたら、みんな黒板にチョークで書き出した。これに続いてクレヨンで紙に絵をかきはじめる。七割位が描画に近い。また、縄とびを何本もならべてとぶのも今日大はやりであった。

◉おやつをいただく

やはり子どもだなとおかしくなる位、ちょっとしたおやつはうれしいらしい。おやつで釣るつもりではないが、つい二、三日前



「さあ！　おやつですよ」こういう時はお行儀がいいこと

までは家庭でしていたと思う。たまにはあげたくもなる。手をよく洗わせたが、今のところは水をはね返さずに三つの水道の前に上手にならんで洗う。

四月十三日（木）

一日毎になれてきてよくあそんでくれる。入園当初にみられる大泣きの光景は全くない。だからいかによりたのしくあそばせ幼稚園を完全に自分のものにさせるかに苦心をするわけである。そろそろ庭に出してあそばせたいが天気が悪くて今日も駄目である。

◉人形劇をみる

今日は保育科の学生の実習日なので、人形劇をしてもらう。筋のまとまった物語でなく、子どもたち自身の生活にあるものから題材を拾ってもらう。動物たちが汽車になって連なったり、歌をうたったり、かくれんぼをしたり……大よろこびである。舞台も部屋においてある子ども用のでしてもらう。その方が、明日からのあそびのきっかけにもなるかもしれない。夢中になってみているが、時々舞台をのぞいて奇声をあげるのはTとKの二人。注意すると「Tちゃん、もうしないよ」といってまたすぐにする。

四月十四日（金）

今日は男女にかかわらず部屋の隅から大きい積木をせっせと運んでくる。運んできては、やたらとつむ。とうとう全部運んでしまった。何だか偉大なことをしたように、みんな眼を輝かせて頬も紅潮している。自然に笑いがこみあげてきた。三歳の今頃は、このようにただ運ぶだけでもおもしろいのかと今更ながら思った。運んだ積木を少し整理してトラックや自動車を入れたり出したりしてあげるとよろこび、そのあともあそびが続いていった。

◉戸外にはじめて出る

今日もあまりよい天気といえないが、もう一週間にもなるので庭に出す。ブランコ、すべり台、白い自動車などうれしくて、うれしくてたまらない。すべり台もいつまでもあきずにすべっている。無口なK子がブランコをしっかりとこいでいる。と同時に一たん、しゃべり出すときりがない位、次々に話をしてくれるのに

恐れ入ってしまった。と同時に、ああよかったとほっとした。Lは戸外だと尚更先生にしっかりとくっついて相変らずにこにことしている。Lは誘っても戸外に出ず、一人になっても部屋の中であそぶ。室内の方が安定感があるらしい。時々のぞきに行ってあ

なれにくい子どもも，さそってお庭へ……

げることで満足しているらしい。

◉歌をうたったり、蝶々やチューリップになってあそぶ

帰りの前の寸暇を、「靴が鳴る」「チューリップ」などの歌をうたう。半分以上が自分から希望してうたう。蝶になってその辺をとんだり、花になって咲いたり、ゆうぎともあそびともつかないようなことをピアノを弾いてすると、一人のこらず参加するので驚いた。（後日、親からの話の中で、これがとてもたのしくてたまらないらしいことがわかり、こちらもうれしくなった）

◉五歳児より手かごをいただく

先日の首かざりにつづいて、今日は手かごをお土産にいただく。新しい五歳児が一生懸命つくった製作品を二まわりも小さい三歳児に渡している風景は何ともかわいらしく、ほのぼのとしたものがある。大切に手にさげて帰る。

入園式以来、一週間が無事にすんだ。そろそろ疲れが出てきて、きげんが悪くなるのではないかと思っていたが、案外元気でいてくれる。次第に保育時間も長くなるし、春の身体検査もあるし、疲れも出てくるし、これからの方がいろいろと苦心のいることだろうと思われる。しかし十人、十色の子どもたちがいろいろの経過をたどって成長していく姿を毎年見ていると、これでこそ教師の生き甲斐もあるのだ、これでいいのだと思わずにはいられない。

三歳児のある一週間の記録

村石京子

幼児の生活はあそびにある。三歳児の幼稚園の生活の中心は、友だちと楽しくあそんで過ごすことにその流れの全てがかかっている。子どもの毎日のプログラムは、友だちとの関係において展開されていくものであり、教師の計画や指導案が子どもの実際の生活よりも重くなってはならないと思う。

子どもの毎日が楽しくあるように、子どもと友だちとの関係が出来るだけ緊密なものとなるように、それも望ましい姿においての結びつきが行なわれるように、との考えを根本におきながら三年保育の一年間を過ごしてきた。

一学期には園の生活になれにくくて抵抗があった子どもや、友だちとの間にいさかいの多い子どももあったが、お互い同士の親密感や努力や、心の成長などのつみ重ねによって二学期後半からはあそびにひたりきれる時間も次第に長くなった。いきいきと活動しよくあそぶ子どもたちの前に来ると、教師の計画は色が薄くなってしまうこともある。今日はうたを新しく教えようとか、童話を聞かせようと計画してあっても、時間のたつのもわすれてあそんでいる姿にひきこまれてこちらもつい予定の時間の過ぎてしまうこともしばしばであった。

また製作などは、自分たちのあそびに必要なものをつくりたいと提案されて、それに適当な材料を探したり、つくる手伝いに大わらわの日もあった。その他にもスキップをしたいとか、レコードをかけてとか、紙芝居やって、と次々と子どもの要求が出される。それが今日のいろいろな予定とにらみあわせて可能である限りは子どもの提案をうけいれてきた。

これは、子どもと教師との関係は、子どもと友だちとの関係と同等程度の位置づけをもち、子どもの発案と教師の計画においても同等程度の重さをもちたいと考えたからである。このことは常に一定不変のものであるはずはなく、ある場合には教師の存在が子どもの前に出る必要性の高い場面もあるが、出来れば教師は子どもの後だてになって見守り、子どもたちの姿が前面に出ていきいきと活動するような生活でありたいと考えたからである。

三歳児のうちから、こうした基礎を培ってこそ、四歳児・五

歳児になっての園の生活は本当の意味で幼児を中心とした生活がつくれると思い、この一年間を過ごして来た。思うことは山のようにあってつきないのに、実際の姿は平凡な記録にしか残っていない。

あそびにはじまってあそびにおわった三年保育の日々もこうした気持で過ごして来たということを記録の前文として加えさせていただくことにした。

十二月四日（月）九・〇〇～一・三〇

・自由あそび

・テレビ〝くまの子バンブ〟

・うたをうたったり、リズムあそびをしたりする

・おべんとう・はとぽっぽ体操

先週から暖房が入ったので部屋の中はとてもあたたかい。部屋の中ではままごとあそびが盛んである。よくままごとあそびというと役割をきめたりすることにかなりウエイトがおかれたりすることがあるが、この級の子どもたちはあまりそれにこだわらないのが特徴である。今日はM子の提案で「ピクニックに行きましょう」ということになり、かごの中にままごと道具一式を入れてゆうぎ室まで出かけたりしていた。

そのうちに、「もしもし、先生ですか。今日は〇〇ちゃんのお誕生会をしますから、お菓子をもってあそびに来て下さい」とか、「赤ちゃんがかぜをひきましたので、お薬をもってすぐ来て下さい」などと電話がかかったりして、私も応接にいそがしい。

男の子たちはつみ木やブロックなどでウルトラセブンごっこをしてあそんでいるが、時々ままごと家から「火事です」とか「かいじゅうが来ました」とかよばれるといそいで手製のホースをもって行ったり、指から何とか光線を発してかいじゅうをやっつけたりして、結局みんないっしょになったりしてあそんでいる。

一〇時四〇分近くなってもあそびもひとしきり山がすぎたので

片づけをしてから、毎週継続してみている〝くまの子バンブ〟のテレビを見る。その後おべんとうまでの時間、どんぐりやまつぼっくりのうたをうたったり、リズムあそびをしたりスキップをしたりする。

十二月五日（火）九・〇〇～一・三〇

・自由あそび

・（ウルトラセブンのめがねをつくる）

・おべんとう・はとぽっぽ体操

このところあそびの中にテレビの影響によるごっこあそびが盛んに現われだしている。今日は男の子のグループ全員と女児ではS子とT子が仲間入りしてサンダーバードとウルトラセブンごっこが大はやりである。以前はブロックを使って普通の飛行機を作ってあそんでいたが、最近はサンダーバード一号とか、ウルトラフォークとか名前がつけられている。積木でつくった飛行場は立体式になっていて、いざというときは地下飛行場からもかくしてあったのが飛びたっていく。いかにもテレビで見たことの再現らしいとおもしろかったり、どんなに子どもへの影響が大きいかを改めて再認識したりする。

一〇時過ぎにY夫がウルトラセブンのめがねをつくりたいと言い出したことにより、何人かが次々と僕もつくる、つくるとはじまって、午前中はこれに大いそがしであった。

ウルトラセブンのめがね

十二月六日（水）九・〇〇～一一・三〇

・自由あそび

・（ウルトラセブンのめがねをつくる）

昨日の続きでウルトラセブンのめがねをつくることが今日もひとしきり盛んである。昨日つくったK夫やS子たちはもう一つ違う色のセロファンをはってつくろうとしたり、新しく参加した

友だちにそのやり方を説明したりしている。試みても思うような大きさに切りぬけない人たちに、少し手をかして手伝ってあげる。

M夫はホッチキスの使い方が手なれて上手である。製作は苦手の方のN夫が一生懸命大きすぎためがねを修正しているようすを見て、友だちのあそびの中で是非必要なものは彼もこんなに熱心につくるのだと感じさせられる。結局、このY夫の提案したためがねにはいつの間にか全員が参加する製作活動になっていた。

出来上がったものをつけて、にぎやかにあそんだあと、自分のひき出しに大事にしまっている。ひき出しの中には、トランシーバー、ピストル、双眼鏡、おさいふやお金、お姫さまごっこのかんむりなどあそびに使われる材料がぎっしりである。

十二月七日（木）九・〇〇～一・三〇

・自由あそび

・おべんとう・はとぽっぽ体操

・お話〝お菓子の世界〟

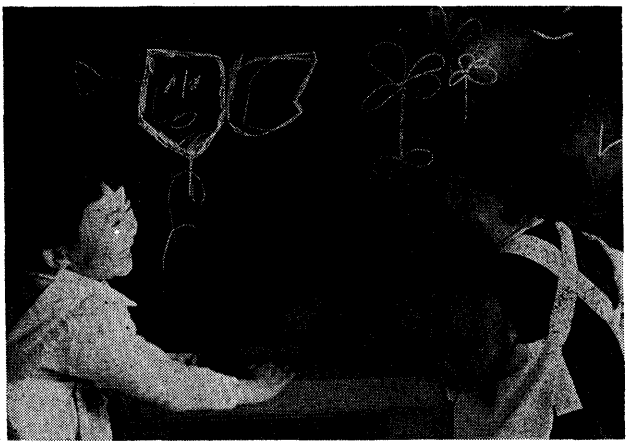
昨日に続いてウルトラセブンごっこが今日も盛ん、双眼鏡やピストルなどもつけて山の方まで探検に遠征している。

お山のジャングルジムはいつの間にか円盤になって〝五、三、二、一、ゼロ発射ドカンー！〟という声とともに宇宙へ出発する。何回も円盤にのって宇宙へ飛びたったり、地球へもどったりしているうちに、ウルトラ警備隊のバッジをつくることになり、部屋にもどる。これは簡単に牛乳のふたをマジックでぬってセロテープで前かけにとめると出来上がりである。

女の子たちは人形芝居をしたり、自由画帳や黒板に絵をかいた

りしてあそんでいた。A子は色のえらび方が美しく表現活動が最近のびて来ていると感じる。

お帰りの前の片づけが今日は随分早い。うたをうたったあと、お話〝お菓子の世界〟を聞いてから帰る。



十二月八日（金）九・〇〇～一・三〇

・自由あそび
・ロボットをつくる
・おべんとう・はとぽっぽ体操

昨日までのウルトラセブンのめがねの製作も一応出来上がったようなので、今日は大きな段ボールの箱でロボットを共同でつくることにした。体が入るぐらいの大きな箱を幾つかもって来ると「何をつくるの？」「何するの？」と興味深々であったが、箱をくりぬいて手や首が出るようにするとそれをかぶって「ロボットになった」と大よろこびである。さらに少し小型の箱は顔にして目鼻をつけてすっぽりとかぶると一だんと本物のロボットらしくなる。A子・C夫・M夫はよく協力して「ここはこうしよう」「こうがいいわよ」などと話しながら楽しそうにつくっていた。

S子とK夫はちょっとグループに入りそびれて困ったようすなのでN夫たちの仲間にいっしょに入れてもらう。同じ製作活動を行なう場合にでも、個人のものをマイペースで製作する場合と、何人かで共同して一つのものをつくる場合とでは子どものようすにいつもと違った反応が見られる。

ロボットは三組出来上がったが、どうやらM夫・T夫が独占しているようなようすなので、かわりばんに使うことをみんなと約束する。そして午後までずっとロボットあそびをして一日過ごした。

十二月九日（土）九・〇〇～一一・三〇

・自由あそび
・ゆうぎ室でリズムあそびをする。

朝のうち、昨日つくったロボットをかぶってかわるがわるロボ

ットになってあそぶ。今日は昨日約束したのにA夫がいつまでもかわらないといってM夫とK夫がいいにくる。以前にくらべて随分協調性がのびて友だちあそびが上手になって来たと思ったが、新しいものに対してはやはり自分中心なものが出るのであろうか。でも今日は出来なくても、明日は出来るかもしれない。彼の心の成長を待ちたいと思う。

ゆうぎ室が使える日なので、一〇時半頃からゆうぎ室へ行ってみんなでロボットや動物のリズムあそびをする。「スキップをたくさんしてね」とN夫から注文が出る。スキップは女児は全員一学期終りまでに出来るようになった。

男児の中で最近まで三人だけ出来ずに残っていたが、先週はじめからN夫が出来るようになってうれしくて仕方のないようす。「スキップしようよ」と時々さいそくされる。K夫もあと一息で出来そう。A夫はちょっとまだ前途遼遠な感じであるが、自分の番が来るとにこにこしながら走ってぴょんぴょんとんでまわっているようすは実にほほえましい。「がんばれ、がんばれ」と声援を送りたくなるような思いである。

一週間の終りなので部屋を少していねいにかたづけたりしてから、来週もまた楽しくあそびましょうと話し合って月曜日を楽しみにする気持をもって帰りにする。

四歳児
四月の一週間

関　治子

組編成は、三歳からの十四名と、四歳新入の二十一名が混合した三十五名からなっている。混合の組であるが、それぞれが早く安定感をもって、楽しい集団生活をすべり出してほしいと第一にねがった。そのためには、じゅうぶんにあそぶこと、必要な生活習慣を適切に指導して身につけること、その上で、できることなら、自分の考えをもって行動する基盤をつくっていけたらと考えた。

ここに挙げた四月の一週間は、三歳からの幼児と四歳新入の幼児とが、何とか一つの集団生活をおくるようになっていった時期である。また、生活習慣を身につける大切な時でもあり、自由にのびのびと生活するための基ともなる時期であった。

四月十四日（金）　曇

四月十日からはじめた朝の手洗いとうがいは、習慣となってきている。朝の挨拶は、まだ小声でつぶやくもの、よろこび、はしゃいでかけこんでくるもの、そばにきて、はっきりいわなくては気のすまないものといろいろでなかには、ただだまってにこにこっとしながら、教師の身体をたたいていくものもいる。

朝の迎えいれは、その日を左右する位大切なので、今は、それによって、幼児と教師の親しみの感情、また、よい人間関係が出来ることを第一として、挨拶の形の上手下手は問題とせず、気持の交流をはかるように考える。

ひと通り、好きなあそびが始まった。主に、新入の幼児は、男児が、一人あそびを始める。線路、乗物の遊具であそぶ。三歳からの男児は、かたまって、あそびなれている積木や乗物遊具をひろげ、次に外あそびへと移動していった。この中に新入の幼児が一人だけ入っている。あとは、新入同士が二人ずつ、かなり強力な仲よしとなった。女児の方は三歳からの二人だけでままごとをしているのが一組あとは、三歳、新入と混り合って八人が、ままごとにはいっている。新入の二人に、三歳からの男児が一人、一しょになって、たくさんある遊具を使ってお店やごっこをしている。そのほかの女児は、一人で本をみるか、えをかく、教師のまわりに絶えずついている、時折、友だちともつく、といった状態

である。

十二日から、外あそびをしているので、今日あたりは、自分の意志で、外へいったり、外靴とはきかえたりを楽しんで試みている感じがする。入園の日以来、母親と離れない男児Aには、母親と教師との連絡の結果、順序たてて、離していくように話し合った。今日は、母親がおつかいにいくので、幼稚園にはついていられないことになっている。本人も納得はしているのだが、顔をみるまでは、涙がかわかない。しかし、遠くに一人でいってしまったりせずに、教師の周辺で泣いているので、もう時間の問題という気がしている。

十時十分に、母親の顔を見ると、泣きやんで安心したのか、外にいけと命令して、あとは砂場で、ずっと安泰に一人あそびをしていた。お帰りの前には、「ママー、ママー」と時々叫んではいたが、教師に声をかけられながら、お帰りまで、もつことができた。

今は、午前中の保育なので、お帰りの前にみんなで、「結んで開いて」をしてあそぶ。ほとんど全員が結んで開いては知っているが、開いたり結んだりの順序などは、はっきりしないものもいる。その手をどこにするか、ここで上にあげたり、友だちの肩につかまったり、鳥になったりしてあそんだ。

幼稚園で使う手ふきが、汚れてきたので、自分の持物を、自分で持って帰ることをやってみる。少しの汚れだと、しばらく、手ふきの前で、汚れているかどうかと考えこんでいる姿もある。

この一日を、ふりかえってみると、幼児の状態をおってみたが、教師の言動というものが出てこない。教師としては、一人の泣いているAを手元におきながら、あちこちと、話しかけたり、手をつないで、一しょにグループの中へいれたり、一しょにつくってあそんだり、その間に、手洗いの使い方を教えたりというように、忙がしい一日をおくったことであった。

四月十五日（土）　曇

ゆうぎ室にいって、広い部屋で、みんなで一しょにあそぶ経験をもった。列になって、並んで音楽に合わせて歩いてみる。並んで歩くことがよくわかって、おとなしく歩いている。元気よい動作をするために、広い部屋いっぱいに、好きな方向に、走ったり、スキップしたりしてみる。解放されたよろこびか、それとも、まだ少し恥ずかしいのか、とりわけ男児がはしゃぎだした。やっと親しくなった友だちに近づこうと必死でかけてみたり、キャーキャー大声を出しているものもいる。幼児に親しみのある動物やあそびなどの模倣、自由表現をしてみた。大体が、はしゃぎ気味である中に、三歳からの幼児が、一生懸命音楽に合わせようとしているのが、成長のあとがあると強く感じさせられた。金魚の

山で草摘みをする

自由表現で、床に腹這いになって、身体を動かしているようすをみて、自分の考えで出てきた表現を本当に大切に育てたいものと痛感すると同時に、教師のちょっとした言動で、幼児を規制してはいけないと思った。

それぞれが、自分で遊具をみつけてあそぶようになってはきたが、一方、はめを外し出したというか、嬉しさの余り、いささか興奮状態と思える。ある意味では、よそゆきの気持がとれて、気分がほぐれてきたともいえるのであろうか。

お帰りの時、二人の男児が、一人の男児の隣の席をとり合った。一人が、おそかったので、ゆずらねばならなかった。一応、教師の話で納得してはくれたのだが、がまんしたと思ってみていた矢先のこと、「バカヤロー」ともう一人に叫んでいた。さぞ、くやしかったのであろうとは思うが、がまんしたということは認めてあげて、帰りの先頭にして、この日を終わった。

四月十七日（月）　雨のち曇

心配していたAも、元気にはいってきて、まっしぐらに、手を洗いにいった。そして、気に入ったブロックキャップを使いはじめた。

天候も影響してか、ままごとのグループと積木組木のグループとが、部屋の中で、互いに交流しはじめた。親しい気持が働きは

じめたのはよい傾向だが、方法が、何とも賑々しい。組木でつくったピストルでうちにいく。うたれる方は、キャーキャーよろこびながらままごとの戸棚の後にはいりこむ。遂には、棚がたおれてしまった。危ない状態ではないがままごと道具が、散らばった。すると、三歳からのピストルでうっていた幼児たちが一生懸命片づけはじめた。そしてきれいにままごとの場を直してくれた。「きれいに直して下さってよかったわね。ありがとう。これで、またあそべるわね」と思わず、みんなの前でほめてあげた。グループの人数は、かなり多くなっている。しかし、朝一しょにあそんでいても、ひとしきりあそぶと、ちがうあそびにはいって、友だちも変わっている場合がかなりある。

砂場で教師とともにあそぶ　近くでみている幼児もいる

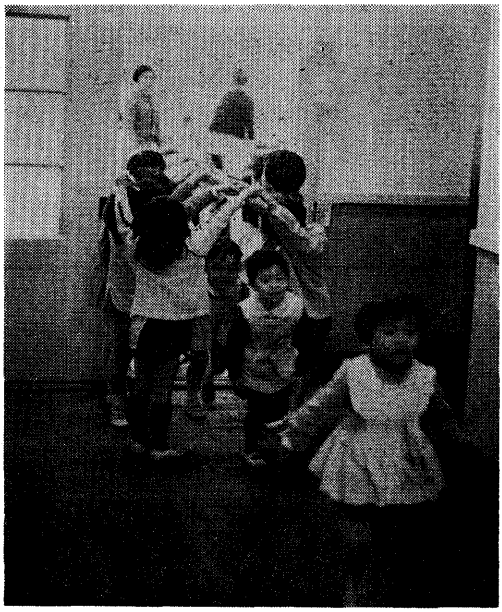
四月の発育測定で、身長と体重を測る。男女にわかれて測定する。男児の方は、椅子の上にのったり、大さわぎ。また、よく着られないのも、男児に多い。女児は、割合と静かだった。いつも大声で愉快に話をするB子が、一人で口を結んで、さっさと後の釦までしたので、大いにほめてあげる。

朝は、あれほど張り切っていたAであるが、発育測定の新しい部屋へは、母親についてきて貰わなくてはならなかった。すんだ後は、もう平気、かえって元気が出て、他の男児とさわいでいた。

お帰りの前のひととき、みんなで、遊具の扱い方について、話し合った。われ易いものは、足で踏みつけてしまうような所に散らさないようにするとか、幼児の中から、なるべく意見をいわせて、みんなで約束した。

四月十八日　（火）晴

久しぶりに晴れ上がって、外で大いにあそぶことができた。Aは、もう大丈夫、ただ、折角あそびはじめたのに、写真をとる



並んでゆうぎ室からかえる

時、ひとさわぎあった。嫌なのだが、それでも、部屋靴のまま、外にでてきて、だんだんに写真に近づいてきた。もう一人、Aがこうして、母親からだんだんに離れてきているのに前後して、女児のCにも、時折、母親の顔がみたくなるものがいた。今日も、「ママは？」と時折いいながら、あそびにまぎれている。後半、庭の外にいる母親に近づいていったりしたがきかけてはいるので、こちらも、もう大丈夫と思う。新入の男児の中には、昨日まで、元気一ぱいで、大はしゃぎであったのが、今日はおとなしく砂場であそんでいたりするものもある。また、甘えて甘えて、抱きついてくるものもいる。ようすが、一日一日とちがうので、どれが本当の姿なのかと考えてしまうことが多い。

その間、新入の方が概して活発で、三歳からの方が、おとなしく消極的な傾向がある。二人だけで、ずっと山で草を摘んで過ごしたり、男児の一人は、紙を部屋に捨てたり、遊具を足でけったりして、なかなか、一年間やってきた簡単なきまりを守れない。これらの行動には、教師が、つい安心感から、三歳からの幼児を、無意識のうちに放任していた結果と、反省する。集団生活に不馴れな二十一名を適切に誘導しながら、三歳からの十四名と合流させていく悩みも感じさせられる。しかし、幼児のこと、思いがけない、新旧の幼児のあそびに、喜びを感ずることもあるし時期的に解決することも多いと思う。

四月十九日（水）　小雨のち晴、時々曇

みんな、それぞれのあそびを始めて、いい具合である。Bも、もう大丈夫、Cは、少しだけ母親の顔をみにいったが、外あそびをはじめると、大層活発。お山では鉄棒を、難なくやってのける。ちょっと頭をおさえるだけで、前まわりもやってしまう。教師としては、Cを中心に動いた一日だった。これで、自信と安定感をもってくれたらと、一日中あそんだ。

2人で蝶を追う

ゆうぎ室のカラーテレビを、各組みんなで一しょにみる。部屋を移動する時は、Aは、一応「ママ！」とよぶ。しかし、もうついてこなくても、がまんできるようになった。

四月二十一日（金）　晴

二十日の木曜日が教育実習日で、実習生が六人いたのと、この日、春の定期身体検査があったので、一日ずらして二十一日のことを記してみたい。

暖かく外あそびがさかんで、外でたくさんあそぶ。主に砂場あそび、ブランコなどの遊具であそぶ、お山へ草摘みなどで、まだ、集団あそびは、自分たちだけでは始められない。「かごめ」や「だるまさんがころんだ」など三歳の時にあそんだようなものも、一しょにあそびたいと計画はもっているが、今日は、明日の始めての誕生会のために、おかし入れをつくりたいと思っている。

みんなが、それぞれのあそびに入って、少したった頃から、教師は、机に、おかし入れの材料を持ってきた。まわりにいた幼児と、常に教師の周辺から離れない幼児とが、「何するの？」と寄ってくる。説明をしながら、紙や、セロテープ、クレヨンを更に準備していると、「あたしもつくるわ」「僕もつくろう」と、新しい道具をもって集まってくる。一つの机を囲んで、十二、三人

手洗いの順番をまつ

で始まった。教師も一しょに、紙をまるめて、セロテープでくっつけたり、模様となる絵をかいたりする。ともかく、一枚の紙から、おかしを入れて、落さないものをつくり上げることである。その必要から、一生懸命、完成させようとしている。全部紙をまるめることが思いつかない幼児もいるが、「こうやって丸めると、出てくるわ」などと教師はいいながら、自分のを試みている。テープカッターを始めてつかう幼児がたくさんいる。二人ほど指を傷つけてしまった。「余り一生懸命切ったら、指まで傷になってしまったわね。今度はこうして切りましょう」といって、要領を手をとって教えてみる。指のばんそうこうは、大事で、始終ながめている。

今日のおかし入れつくりは、出来栄えは、粗末ではあるが、自分の力でつくったものとしては、こんなに貴いものはない。自分の作品を、定められた所におき、紙屑、鋏を始末することも忘れがち、ここにも大切な仕事がある。出来た幼児は、またあそびにいき、友だちからきいたり、自分でみにきたり、教師に誘われたりして、順々に、自分のおかし入れをつくって、明日の誕生会の準備もできた。期待に胸おどらせて、はじめての誕生会を待つこととなった。

軌道にのるまでには、かなりの月日が必要であるし、繰り返しがとても大切である。このような四月を経過して、一年間を終わった現在、感じることは、幼児期の一年間の成長の大きいことである。本質的には、幼児は、それほど変化するものではないように思うが、集団生活に入りたての四月頃には、過渡期であるところから、定まらないいろいろな面をみせてくれる。ある程度、時間をかけて、幼児を観察しないと、間違った印象をもって接してしまう恐れもある。しかし、どんなことも、教師と幼児との心のつながり、互いの信頼関係ができることによって、進められていくのではないかと思いを深くしている。

四歳児

十月第一週の実践記録

村田修子

衣更えといわれる十月の声を聞くと、気候も安定してくるためか、幼児の態度もしっとりと落ち着いてきて、「何をやる」というように行動が目的にややつながりを持ってきたり、「やって楽しむ」という気が感じられてくる。

その時期にちょうど運動会という行事が大きな重みを占めている。子どもたちはその大変そうな運動会を楽しみに待ちながら、その反面、いろいろなことを覚え、しかもみんなと一しょに整った形にしなければならないので、そこに自分を押えてがまんすることが要求されるので、子どもの心の中にもやりたいことを中断される不満とあきらめと、しなければならない責任感にも似たような気持が感じられて、苦笑させられるのが毎年のことである。

そこで運動会をきっかけにして、戸外で運動をする機会を多く作り、簡単なルールのある遊びをみんなでする楽しさがわかって、進んで参加するような気分を作り上げるようにしたい。ねらいはそこにあっても、なかなか目的に到達しないで、かえって反対の方向にむいてしまった一週間をとり上げてみる。

十月二日（月）雨

「一日を通じての記録」

予定（話し合い、運動会の紙芝居、音楽リズム）

運動会にそなえて、春の運動会のとき使った紅白の帽子を、家から持ってきて引出しの中に入れておくように、前週の土曜日に伝えてあったので大部分の子どもが持ってきて「これどうするの」と聞いたり、たしかに持ってきた、ということを示しにくる。またすぐにかぶって活動が始まる。家から何か持ってきたり提出物のとき、たいていきちんといかない子どもがあるが、子どもによっては、「おかあさんに言ったのに忘れて入れてくれなかった」と困ったように、悪そうに言う。そういう言葉を聞くと子どもには「明日でもいいのよ、おかあさんはきっと忙しかったのよ」とかばってやるが、親に何とかひとこと言いたい気持になる。

こういう物的な刺激があると、遊びが活発になる。あいにく雨なので遊戯室で帽子をかぶってはしり廻っている子どもが多い。

指折り数えてみると何日もない運動会までに、一応あれもこれも覚えさせて形を整えなければならない教師にとっては、何となく気がせいて、帽子をかぶって走り廻っている姿をほほえましいとばかり言っていられないので、みんなの遊びが佳境に入らない前に、集まって話し合いや運動会に関係のある紙芝居「いたくはないの」を導入として使い、全員を、自分たちも運動会をするのだ、という気持にさせようと思い九時四十分頃へやに集める。

話し合いは、先ず昨日あったことについてひとりで前へ出て皆に話をする。前へ出ると大きい声で言えないし、聞くほうもむずかしいので、五人位がせいぜいである。小さい声の子どもは要点を反復して助けてやったり、積極的な子どもばかりにならないように配慮する。今日はよく聞いていた一人が「そこへ誰といったの？」と言葉をはさんだので「そういうように聞いてみるとよくわかるわね」と言ったことが刺激となって「それはどこにあるか」「どうやっていったのか」「それからどうしたか」というように質問することがおもしろくなってしまって、かなり長い間話し合いが続いた。

「今度は紙芝居をしましょう」というと歓声が上がる。

すんでから春の運動会、父親の勤め先の運動会について話がはずむ。今度のは小学校の人たちと一しょで、「みんなはこういうおゆうぎをするのよ」と大体を話すと、お母さまと一しょにするゆうぎのことに一番関心が集まる。その反応はいろいろでおもしろい。恥ずかしい、という子、親のほうができるだろうかと心配する子、自分が教えてあげると張り切る子、左右の子と顔を見合わせてウフフフ……と笑う人など。

「それではお母さまに教えてあげてね」と言うと、みな、うんとうなずく。ただ一人Iちゃんは「一ぺんじゃだめかもしれない」と心配する。だんだんに覚えればよいことを話して、「どじょっこふなっこ」の曲をひくと何人かが「知っている」と顔を輝かす。

ラララ、でわかっているところだけうたったり、拍手をしたり、四季のことを歌っていることを話したり、座ったままできる簡単な動作をしたりなど変化させた扱いをして何回も全体をつかませるようにしていると、ちょうど遊戯室を使える順番がきたので、手洗にいってから並んで広いところへいく。

先ず機敏に反応するように、音がしたら椅子から早く立つ、こんなこともおもしろくてたまらない、それから歩いたり走ったり急に止まったりしゃがんだり、いろいろ変化をつけて基礎的な動きをしてからさっきのうたについて「みんなはどじょうやふなになって泳ぐのよ」というとすぐそのようなかっこうをして泳ぎ廻る。

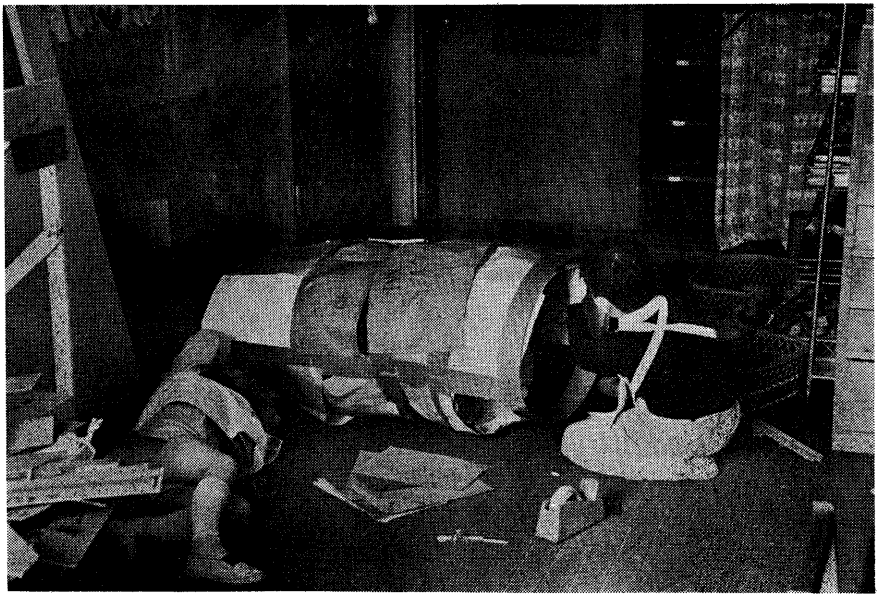
「お母さまはまわりで池になるから、先生が一人でそれをしてみましょうか」というと、「いるつもりか」とTちゃんが、ぽつ

りという。子どものほうの動きとしては変化はないので、二回位してフォークダンスやスキップをしてからへやに帰る。

朝からずっとしばりつけておいたような形になったので、みんな自分のやりたいことにとびついていく。

何人かは飛行機作りに余念がない。その会話……「いいのできたね」「サンダーバード一号だよ」「かっこいい」「どうやって作るの」等、聞いていると集団の中でのものごとのはこびをのみこみ、自分のあり方などが身についてきた感じである。

十一時半、お当番の人に手伝ってもらって食事用のお盆や机をふいてからみんなに知らせてもらう。食事の仕度も既に手順よく運ぶようになってきているけれども、Mちゃんのようにうがいを忘れ、手を洗っただけで水道のところから離れていく子もあるので注意していなければならない。食事の挨拶はお当番が一番張り切るときである。食事がすみ、一時から全員でする体操になるまでの間の自由遊びは、朝のそれとは違ってすぐに遊びに入っていく。一時になると園全体にレコードが流れる。みんなばね仕掛のお人形のように走り出して各組の前に二列に並ぶ。夢中になって集まるところが可愛いい。女の人の列の方がいつもじょうずである。体操がすんでから庭中を行進してへやに帰り、片づけをしてから当番の人は挨拶をし先頭になって並んで帰る。今日は雨でへやの中だけだったせいもあるが、何か心せわしい一日だった。



細長い丈夫な紙で組み立てたロケットの仕上げ

十月三日（火）朝雨、のち曇

「計画と反対の方へ向かった活動を中心として」

今日は新しい歌や運動会にするときのものをしよう、と予定していたが、昨日一日は自分の思ったことが十分にできなかったせいか、登園してきてから男の子は画用紙で飛行機作りに余念がなく、女の子たちは遊戯室で活発に遊んだり、遊びに使う為にお面を作ったりして、それが次第に交代してうまく流れている。一年のうちに何日とないよいふん囲気なのでその状態を続ける。十時四十分頃それがややだれてきたので、みんなで集まり今まで作った飛行機をみながら、「飛行場を作って並べるのどうかしら」と持ちかけると「賛成」とか「先生っていいこと言うじゃないの」等思わず笑ってしまうようなことを言う。普段女の人の製作活動に、この種類のものは出てこないので、どうするかという私の好奇心も手伝って、みんなで飛行機作りをすることにもっていく。

その結果、女の子の大部分が困ったような態度をしたこと、またでき上がったものは、いわゆる観念的な飛行機が多くでき上がったので、男児と女児の関心の違いをはっきりと見ることができた。男の人は、自分たちがしているものをみんなで作り上げようという計画にすっかり張り切ってしまって、次から次へと変化をつけ、また違うものを考えたりして、割合に時間がかかってしまう。今日は帰りの前に「おみやげにんじん」の曲をひいて拍手したり、何の動物の出てくる歌かなどの話し合いをしたていど。

十月四日（水）晴

「その二」

朝きてからすぐに男の子だけ飛行機作りをし、女の子は久しぶりの外遊びを楽しんでいる。赤帽をかぶっての低鉄棒や砂場遊びもよい光景である。今日は遊戯室を使うのが早い順番の日なので、九時三十分頃からみんなで行って昨日の歌を歌い、また歌いながらにんじんをふり廻すようすやたべるようすをしてだんだんに覚えるように仕向ける。遊戯室での楽しみはスキップをすることらしい。一人ずつみんなの前ですることはほこらしい気持になるためか、とても張り切って足がもつれることさえある。それぞれのテンポが違うのでする人に合わせてピアノをひいてあげる。

保育室に帰る前に「へやに帰ったら昨日作った飛行機を並べる飛行場を考えて作るから、まだ足りないものがあったら作りましょうか」と持ちかけると、飛行場にあるいろいろのものをあげる。ビル、見る人、自動車、荷物を運ぶ車など、それでへやに帰ると、そういうものを作る気に十分なっているので活動がすぐ始まる。私はたくさんにできた飛行機に紐をつけて、へやの一角に張った紐にむすびつけて、立体的に飾り出した。子どもたちはそれを見て、ますます一つのものを作ろうという気分が盛り上がっ

てきたようであった。いつも見るテレビの人形劇も今日は見ずに十一時半の帰る時間がきてしまう。

十月五日（木）曇

「実習生の指導の一日を中心として」

Tさんは近づいた運動会にそなえて、へやを飾る万国旗（半紙四分の一）を作ることと、運動会でするものの歌を歌う予定をたてていた。

登園してきた人から誘導して何をするか説明してマジックインキで書く、人数が多くなってくると、新しくきた人に対してこの働き掛けが少なくなるので、参加しそびれてしまう人が七名位できてしまう。こういう保育形態の場合はなれないうちはどうしても目の届かない人ができてしまい易い。そしてその結果でき上がったものは割合に雑なのが多いように感じられる。これはそのつど注意しなければならないのだが、実習生はその点を省略するのでこうなってしまう。本を見て正確に書く人、かわいい絵のついた旗などたくさんでき上がったが、その中に、Uの字のまわりに星のついたユニバーシアードの旗が三枚位できた。身近な環境設定の大切さと、幼児といえども世の中とのつながりのあることを身近に感じた。

実習日のようにおとなの手の多いときは、子どもの態度が雑な

現在はみんなまざって遊ぶようになった

感じになる。そういうふん囲気で「おかえり」になる。

十月六日（金）曇のち晴

「飛行場作りを中心として」

昨日作った旗をへやに張りめぐらしておいたら、来た人から歓声をあげて自分のを探す。そして旗のついていない部分にも張ろう、というふん囲気になる。早速その思いつきをほめると、みんなで旗作りが始まる。女の人は全くていねいに作っているが、こういう平面的なものになると男の人は正反対。それが自分たちで相談して製作活動の始まったときはその思いつきの奇抜さ、細かい点までていねいに、思い通りでき上がるまで長い時間かかってもやるので、こういう点が原因なのか、男の人と女の人がはっきり分かれてしまう。この融和が現在一番の問題である。

飛行機をさげた下に紙を敷き、飛行機を並べていると、まわりにいた人が既に作ったものを持ってきて適当に並べてくれる。外遊びをしていた人も段々にへやにきたと思ったら、三人ほど紙の上に上がりこんで、あっという間に滑走路、見る人のいるところ等と区切ってしまった。相談せずにやったため線がくい違ったりしてやや乱雑な感じはするが、平面的だった飛行場に活気ができた。やり終わって眺めたみんなの顔は安心したようであり、特に男の人は満足気である。これは飾っておいて見てもらうことにする。

十月七日（土）雨のち曇

「外での集団遊びを中心として」

朝、家の人が飛行場を見にくる。五歳児もききつけてきて一応文句をいったり「なかなかかっこういいじゃない」などといわれて首をすくめたりしている。

運動会が近いのに一向気分が盛り上がっていないので、今日は一日赤帽白帽をかぶってみんなで遊ぶ計画をたてる。庭に出られるようになってからまず折り返しリレーをする。すんだ人は何回もうしろにつき、いつ終わるか分からないリレーの次に、紅白球でたま入れをする。これが宙にとびかうと何となく運動会の気分がする。このときピーッと笛でも吹いてやると一層活気ができる。これらを十分にやったあとは、みんな帽子をかぶったままぶらんこに低鉄棒に草つみに、というように戸外での活動が展開される。先生の心のあせりをよそに、この何日か思わぬ活動に盛り上がりをみせたが帰りの前に運動会でする歌などやってみたが何回もしなかったそれらを一応のみこんでいたのには驚いてしまった。やはり他の組の人のしていることをそれとなく聞いたり、運動会でするもの、という関心があるせいなのだろうと思ったし、おとなと同じように、今はどうしてもこれをしなければと思うようなときに関係のないことがやりたくなることが子どもにもあるのだろうと思いながらすごした一週間であった。

五歳児

平凡な一週間

堀合文子

五歳児になると、教師中心から幼児中心へ移行する。

三歳からまたは四歳児からの基礎指導の基盤の上に幼児の創造性は養われ、自由自在に幼児の活動がくりひろげられる。その生活の中で幼児は五歳児として自分の全身でぶつかり全力で活動してそれぞれ発達伸張している。

教師はその活動がより発展するように、そして幼児が十分に自発活動ができるように環境を設定したり、整備しなければならない。

一つの遊びも自分たちで考えられ、幼児間で相談してルールも作られ、次々と活動していく。教師が入る余地がない時もあり、むしろ教師を友だちの一員として呼び入れてくれる。

友だち相互間の関係が密になればなるほど、この状態は強く、また活動も日をおって活発になり、遊具を使い、素材を使って自由自在に経験して過ごしている。

× × × × ×

月曜日（十一月十三日）

男子のグループの一員がなんとなく友だちの来るのを待って、二、三人ふえると途端に部屋から姿を消し、遊戯室で宇宙ごっこが始まる。次のグループは庭へまりを持って出かけてサッカーが始まる。残る三、四人はままごと道具をせっせと庭にはこび、レストラン。これには女子も自然とまじる。女子はピアノを弾くもの、空箱で制作するもの、本をよむもの、縄とびをするもの、サッカーに入るもの、遊戯室の片隅へ陣どって先着の男子のグループの内助の功をしている。制作には男子も二、三人混ざり、黙々として自分のイメージに向かって創造している。

教師は各グループごとにその状態や活動をそっとみて歩く。そのうち〝先生サッカー入って、たりないんだから〟と、欠員補助のために呼ばれる。教師は制作の人たちに、より一歩前進するためにとのぞくが、自分たちは自分たちの目的のために全身全力。耳をかたむけるどころでなく自分は自分の力で作りあげている、〝先生、ここ開くようにしたいんだけど〟と空箱や紙類ではとても無理難題を持って来る。自分のイメージが現実におえなくな

ると教師のところへ持って来る。〝そうね、これはむずかしいわね。どうしたらいいかしら〟幼児と共に考える。〝ほら、よくあるでしょう。ここがすーっと開いて自然に閉まるような。そして鍵もかかって〟〝そうね。どうしたらいいかしら〟教師は何とかこの幼児の考えを実現できる範囲で実現してやりたいといっしょうけんめい考える。〝ここのところにセロテープを裏表からはって、ゴムをここにつけ開けたらのびて、またしめると元にもどらないかしら〟〝そうだ、じゃあやってみよう〟

〝先生、パパのおたんじょう日だからカフス釦をつくりたいの〟これまた難題。〝まあいい考えね〟〝何か石のようなのない〟〝そうね、じゃあお庭へいってきれいな石をさがしていらっしゃいよ〟途端に庭へとびだしていった。

〝そうだ、サッカーに呼ばれているんだった〟とあわてて庭へ。靴を取りかえていると、〝先生、おいしいケーキができたの、たべにきて〟〝あら、おいしそう〟砂場のへりに砂製のケーキがいろいろの飾りをつけておいてあり、その前に積木の椅子が一つちゃんとおいてある。私の出てくるのを待っていたごとく用意されている。〝ではちょっといただいてから〟と積木の椅子にすわりケーキをごちそうになる。〝まあおいしいこと。いい味ですわ〟コップに茶色の泡の立った水を入れてきて〝これコーヒーです。どうぞ〟〝どうもありがとうございます〟

三歳の時からこの会話はやってきた。しかしその会話の中にも、ごちそうの中にも五歳のにおいがする。ケーキの形、ナイフ、ホーク、椅子など。きたなく泥になったおしゃもじの切れ端や積木の割のこりがみなそのものになって生かして使われている。五歳児としてあたりまえのことだが教師として何かうれしい。

やっとサッカーに入れてもらう。自分たちのルールがあるらしい。ラインから出てしまった。キャプテンが黙々としてまりを中心におき二人を呼びよせる。また出た。〝○○ちゃん外〟というとラインの外へでてなげようとする。〝ちがうちがう、上からだよ〟いわれるままに頭の上から両手でまりをなげる。またそこからはじまる。〝まって、△△ちゃん、ここに来てけるの〟〝ポーン〟〝かった、かった、三対一〟一点の人はしょぼん。三点の人は両手をあげとびあがってよろこんでいる。何が何だかルールがさっぱりわからないが、みんなを見ながらついていく。どうも負けているらしいので一つ入れなくてはとがんばる。が、なかなか防御力も強く手ごわい。いつの間にか教師も夢中になってしまう。相手が幼児であることを一瞬忘れてしまい、自分でもにやにや。

〝先生〟〝あとでちょっと来てね〟レストランの人がよびに来る。〝先生―〟〝××ちゃんがころんじゃった〟〝血が出てるよ〟それ大変といく。たいしたことはないが、赤チンキをつけておく。

部屋の製作はだいぶできていて、マジックで一しょうけんめい塗っている。遊戯室の人は部屋にもどりブロックで飛行機をつくっている。二人ばかりステレオの前でレコードにききいっている。女の人が側にある鈴を音楽にあわせてふっている。それぞれたのしそう。

ふと時計をみると十一時二十分。今日のお当番に〝おべんとうだからかたづけましょうとみんなに教えてあげてね〟とたのむ。〝先生ここまでできたけどまた明日やる〟〝僕もうできたけどどこへおいておく〟〝スチームの上においておきましょう〟〝紙屑やお道具をよくかたづけてね〟

遊戯室の方はとのぞきにいくと、大積木で勇壮に宇宙基地ができていて、もうかたづけ始めている。それぞれかたづけの活動でそれぞれの場で活動し、協力がはじまる。箒ではこうとすると〝先生かして〟と取りあげられる。友だち同士語りながら誰いうとなく作業の分担が自然とでき、みるみる中に部屋がきれいに整頓されてくる。〝あ、まだあの組木の棒がきたないな〟と心で思う瞬間、だれかの手がその箱にさわり、あけられて整頓にかかると、自然と、二、三人が手伝いに集まる。ふしぎふしぎ、幼児の世界のきまり、協力援助、実行が、誰の指示もうけず自然とスムーズに行なわれていく。

教師がお盆とふきんと用意するとお当番がきてふきだし、他の者はそれをくばる。くばりおわるとおべんとうを取りにいき、おべんとうの用意。

おべんとう

おべんとうがおわると午前の続きをするもの。また新しいあそびをするもの。おべんとうをいただきながら友だちとあそびの相談をしたりしている。先にすんだ人が〝ジャングルでまってるわ〟〝どこでまちあわせ〟〝鉄棒ね〟〝じゃあいくわね〟こんな会話は何か錯覚をおこしてしまう。教師は自分の年も忘れ、青年たちと生活しているようだ。

もちろん体操のレコードがなるまではまた、たのしい活動。午前の制作をたんねんにやりあげている人もいる。また改めて作りだす人もいる。

体操　帰園

火曜日　水曜日　木曜日

ほとんど同じことのくりかえしだ。大きいグループはほとんど動かない。ただ個人個人は常に同じグループにいるとは限らない。ある人は製作に入ったり、サッカーに入ったり、砂場へいったり、ほとんど交流している。

金曜日（十一月十七日）

今日は遊戯室が使用できる日だからゆうぎをしようと教師の計画。

幼児の活動は依然として交流しながら同じ活動がくりかえされている。教師の計画の中の時間はきた。制作の人たちは夢中で制作、レストランも必要に応じてメニューや、看板や、ごちそうを交代してつくりにくる。その他のグループも今日あたりは交流している。サッカー選手のために砂場の休憩所ができたりほほえましい。それぞれのグループでそれぞれくふうし考えて活動経験している。今日、何もそれをこわして集めて遊戯室へつれてゆかなくてもよいとの判断で今日は中止。

× × × × ×

一週間とりあげても五歳児の活動は続く。いや、二週間、三週間と続く。その活動が教師の計画したものより、より収獲の多い活動が実現されている。一人の落伍者もなく。これが五歳児なのだ。平凡な、何もなされていないような日々だが、その中で幼児が考え、くふうし創り出しているその活動は偉大であり大切なカリキュラムなのだ。私は五歳児と生活を共にしながら、現在共にある五歳児をみながら、前に経験した五歳児と考えあわせながら次のことを今年は新たに確認したようだ。

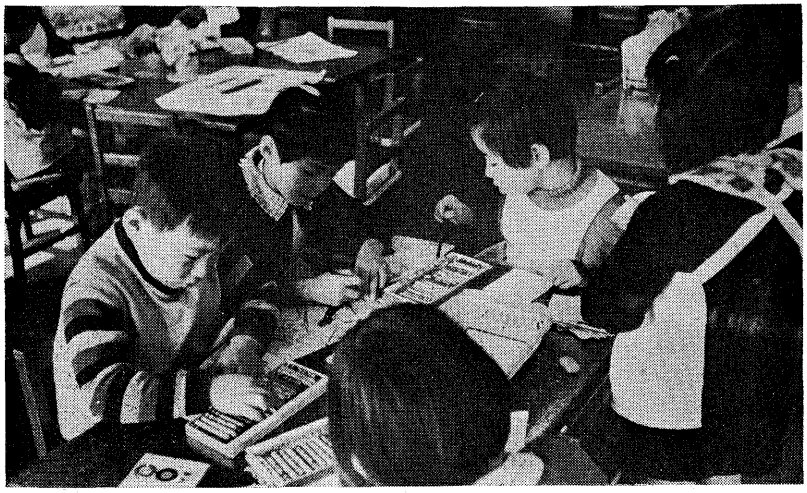
○五歳児は、グループの中でも個人でも幼児の活動を十分発揮できるように、教師は環境設定しなければならない。

○活動できるためには、三歳児、四歳児の間の指導ということが大変大切で、これがすべて基盤になっている。

○三歳、四歳での基盤の上にたって五歳児は自分自身の活動をつくりあげている。

○教師が計画をたて、誘導していくものは、小さい計画も、大き

い計画（お店やごっこ、動物園ごっこ、その他）も五歳児は上手にもやってくれるが、それは三歳、四歳で教師が援助しながら大いにやるべきで、五歳児はむしろ教師の計画に誘導しないで、活動としては淡いし、安易だが、幼児からでた自発的な活動を育て誘導することを努力したほうがよい。



○その自発活動となってでてくるそのものを五歳児までに育て指導しておく必要がある。

○もちろん、五歳児の活動となってあらわれたものは、個人個人をよりよく前進伸張するよう教師は指導しなければならない。

こんなことを、生活している中に考えたので、五歳児として二学期も三学期も五歳児の能力と考えあわせ数週間かけての大きい計画また、小さい計画をもっていたが、十一月半ばすぎに私はその計画をさらりすてた。そして幼児の活動、毎日くり返される平凡な幼児らしい経験を大切にし、その都度、その個人によって指導した。

外見は、大きい計画、五歳児らしい計画は何一つしなかったようで、常に遊びくらしたとみえるだろうが、五歳児の三月、卒業していく幼児をみて、教師が計画しなかったこともちゃんとできる、むしろ計画して経験させた時より豊かな経験と能力を持っているようだ。

幼児と教師が常に平凡な生活をおくる中にポイントを握り、幼児を指導し伸張していくのが五歳児の教師ではないか。三歳児は別としても四歳児、五歳児とのカリキュラムも自然と今までとは変化するのではないかなと自分の頭の中を通っていく。五歳児の一週間は、どこの一週間も外観からは同じような一週間だし、活動だが、その中で、深さのふかいふかい経験を幼児はしている。そしてこの一週間より次の一週間、次の一週間と伸張している。

五歳児の生活
ある一週間

守永英子

この三月に五歳児を送り出して、過ごしてきた日々を、やっとふり返るゆとりを持てた今〝子ども、この未知なるもの……〟としみじみ思いを新たにしている。二年間あるいは三年間育てた子どもを送り出すこと三回。そしてなお、悩みや迷いの尽きぬこの頃である。

以前五歳児を受け持った時の日誌を開いてみると、五、六月頃には十二、三人から十五、六人のグループで、野球やリレーを楽しんでいたようであるが、ことしの組は、一学期中二、三人から四、五人の小グループに分かれて遊ぶことが多く、組全体の動きに盛り上がってくるといった活動があまりみられなかった。

組を構成している子どもたちの性格にもよるものであろうか、私の方からの働きかけで遊びはじめても、長続きしないで、すぐにバラバラになってしまう傾向があった。

グループでの遊びが活気をおびてきたのは、やっと十月に入ってからのことである。このような傾向の組であったが、十二月に入っての一週間をふり返ってみると、活動はかなり活発になってきているように思われる。

十二月四日（月）

次第に寒い日が多くなるにつけ、子どもの活動も室内遊びの時間がふえてくる。子どもたちは、いつも自由に作ったり、描いたりしているが、時には、テーマをもった描画も新しい刺激となると思い、今日は、〝大きくなったらこんなことをしたい、こんなものになりたい〟というテーマで絵をかくことにする。

「お友だちにないしょね。絵をかいてしまってから教えてあげることにしましょう」ということで、話したい気持を秘密にして、絵にぶつけさせたことは効果的だったようであった。いつもより熱心にかいているようすがみられた。女児では、ピアノの先生、バレーの先生（教えているところや自分で演じているところ）、看護婦さんなどが多く、学校の先生や食堂のウエイトレス、南極探検船の船長などもあった。

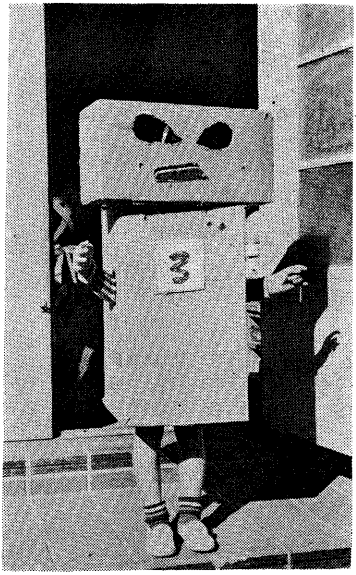
男児には、ジェット機のパイロットが最も人気があり、その

他、船長、自動車を作る工場の人、ロボットを作る科学者、ガソリンスタンド経営などさまざま。

かいたあとで、絵をみせながら、〝自分のしたいこと、なりたいもの〟について話をさせる。「大きくなったら看護婦さんになって、赤ちゃんのお世話をするの。今、おしめをかえてあげるところなの」というN子の説明にどっと笑い声がおきたり、「私が南極探検隊の船の船長さんで、○○ちゃんと○○ちゃんは船の人、○○ちゃんたちは送ってくれてるの」と仲よしのお友だちも計画の中に入れてしまっている。「女のくせに船長さんか」などという声に、話し手のはずかしそうなようすもかわいらしい。話す子どもも聞く子どもも楽しそうな顔……教師にとっても、楽しい活動であった。

組全体がまとまってする活動の時を除けば、あとは各自が、自分の意欲にまかせて、ひとりで、あるいは友だちといっしょに、大小さまざまな箱や紙などいろいろな材料で、ロボット、ひこうき、ピストル、ギター、家や家具、望遠鏡、花などいろいろなものを作ったり、自由画帳に絵をかいたり、レゴ、積木、ブロックキャップなどで作ったり、戸外で、リレー、野球、鬼ごっこ、砂遊びなどを楽しむ。

K男は大きなダンボールの箱を二つも使ってひとりでロボットを作っているし、F男は箱の底をぬいて色セロファンをはったものをいくつも重ねてはりつけテレビカメラを作っている最中、あとからT男、H男も参加しているようである。女児は針金に色セロファンや七夕紙で花を作ってつけ、ヘアバンドを作っているのだという。誰かが作りはじめたのに刺激されて数人が次々と作りにくる。



数日かかってひとりでつくった
ダンボールの箱ロボット

入園当初、自分の時間や自由をもてあまし、すぐ家に帰りたくなった子どもたちの面影は全くない。子どもたちは、自分の時間や自由を謳歌し、子どもたちの活動は果てしなく続く。

十二月五日（火）

ゆうぎ室にいく。歩いたり、スキップしたりを音の高さと結びつけて、高音の時は女児、低音の時は男児、中くらいの時は全員

というようにきめておき、音の高低に従って交替にする。このような簡単な遊びを、子どもたちはよろこんでくり返し、自分がまっ先に音をききわけようと張り切ったり、遅れた時にはおかしそうに笑ったりする。

今日は〝魔法つかい〟のゆうぎをする。子どもたちは普段の遊びの中でも、魔法の杖を作って遊んだりするので大喜び。曲の三つの部分もよく聞きわけられ、魔法つかいが出てくるところ、魔法をかけるところ、かけられて相手がそのものになるところが、それぞれにつかめたようである。魔法がかけられるまで静かにしていた子どもたちの間に、魔法がかけられるところになると、期待にみちた笑いが思わずもれる。子どもたちは自分が魔法つかいになりたくて、何度もくり返してくれとせがむ。

ゆうぎ室から戻ると、卒業アルバムの表紙にとりかかる。何色もあるラシャ紙の中から自分の好きな色を選んで、ポスターカラーでかく。いつものようにかきたいという子どもからかきはじめたが、この絵を表紙にしてアルバムをつくり、みんなの写真をはって卒業の時にあげるのだと話すと、とても楽しみになったようで、「今日かかなかった人は明日でもいいの？」「ぼく何をかこうかな」などと積極的になってきたようであった。

数人ずつ、アルバムの表紙をかいている間にも、K男はロボット作りの続きをし、「前に番号をつけたんだよ」と考えている。F男のテレビカメラはできあがり、お山にうつしにいくといって、三、四人でかついで出ていった。花のヘアバンドを作ったA子が「舞台で踊る人みたい」というので、「みんなでバレーしたら」というと、「だって私ならってないからできない」という。「いいじゃない、みんなで好きなように踊れば」というと、「じゃあ、U子ちゃんに先生になってもらおう」と庭に探しにいった。A子の提案が受けいれられたのか、何人かの女児が、自分の作ったヘアバンドをとりにきて、またいそいで庭に出ていった。こうして、前日のように、各自の活動は、自由に展開していく。

十二月六日（水）

アルバムの表紙の続きをする。「大きくなったら……」のテーマでかいた絵は、いろいろな表現があっておもしろかったので、もう少しいろいろなものをかいてくれるかしらと思ったが、表紙ということで気持が改まってしまったのか、やはり、今まで何度もかきなれた船、ジェット機、女の子、花などに逃げてしまう人たちが多いのは残念だった。

水曜日の人形劇は、年少組もいっしょに、ゆうぎ室でカラーテレビをみる。「ねずみと王さま」は、子どもたちも興味をもってみているようだった。水曜日は十一時半までなので、子どもたちは「もうお帰り、はやいね」と遊び足りない顔で帰っていく。

十二月七日（木）

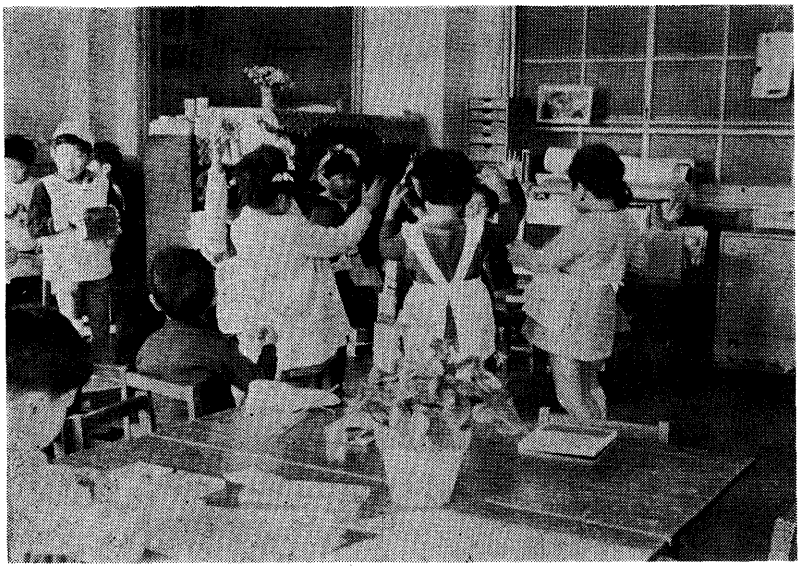
今日は実習日。幼稚園教員養成科の二年生も、二年の後半になると、自分で保育案をたて、ひとりで一日責任をもって保育することを学ぶ。

保　育　案

9：00	登園 自由遊び
9：45	絵画製作 （実物大の人間をかく）
10：45	音楽リズム （木，風，落葉などの表現をす（る
11：15	おはなし 「ライオンのめがね」
11：30	おべんとう
1：00	ハトポッポ体操
1：30	降園

〝実物大の人間をかく〟活動は、大きな紙の上にひとりをねかせて輪郭をとり、モデルをよくみてクレヨンで色をつけ、切りぬく。保育者は、観察する目と協力する気持を養うためにこの活動をとりあげたということであったが、参加したのは一部の子どもたちだけで、あまり盛り上がらずに終わってしまった。担当者や他の観察者の感想は、〝おとなが机上で立てた案と子どもの気持とのずれを感じ、子どもの活動を本当にいきいきとしたものにすることは、実にむずかしい、ということのようであった。

バレーごっこ



バレーごっこ　バレーをする人とテレビカメラマンと観客とバレーリーナを写せいする人

十二月八日（金）

花のヘアバンドをつくる子どもは次々ふえてきたが、そのうちの何人かは、毎日頭につけては庭に出ていく。

どうも〝子どもの家〟が根城らしいので、行ってみると、「ワァ！　先生がきた、はずかしい」と大騒ぎ。「お客さまになるから入れて」と頼むとやっと許可がでた。U子が先生になって、あとの八人が横に並び、バレリーナらしいおじぎのし方を練習している。ヘアバンドがすぐ落ちてしまうというので、ゴムをつけてあげる。

U子の指導で何度もおじぎをやりなおし、それがおもしろいらしいが、あまり発展しているようすもない。そこで「レコードをかけてあげるからお部屋でしたら」と誘ってみる。「いやだあ」という消極グループと、「そうしようか」という積極グループに分かれたが、結局、積極グループの声に従って部屋に戻る。

何枚かのレコードをかけてあげたが、子どもたちが気にいったのは、ポンキエルリの〝時の踊り〟とチャイコフスキーの〝四羽の白鳥の踊り〟の一部が収録されたもの。美しい軽快な感じが気にいったのか、くり返しかけては、円になって両手をあげてキラキラさせたり、まわったりしていたが、何度もかけているうちに、〝時の踊り〟から〝白鳥〟に変わるところがわかったようで、

〝白鳥〟になると、円周の子どもたちは床に仰向けにねて足を円心にむけて交互にすばやく上下させ、ひとりは円心に立って両手をあげてまわるなどの型をとるようになってきた。

部屋にいあわせた子どもたちは、自分の製作の続きをしながらバレーをみたり、いすをもってきて観客になりすましたり、テレビカメラのグループは、バレーを撮影するのだと隅に備えつけて色セロファンのレンズをのぞく。M男は、自由画帳を出してきて「バレーしているとこかこう」とかきだしたが、動くのでむずかしいらしかった。はじめは、少しはずかしそうであったバレリーナたちも夢中になって、自分たちでレコードをかけなおしては、何度もくり返し踊った。

バレーを撮影中のテレビカメラ

子どもたちの夢中になった輝いた顔――これが保育する者に与えられる最大の報酬かもしれないと思う。

十二月九日（土）

来週の誕生会のために、お菓子入れをつくる。いろいろとくふうをこらす子どももあるし、自信のある簡単なやり方で作ってしまおうとする子どももある。くふうした子どものを「ほら、○○ちゃんのここのところよく考えたわね」などとみせてあげると、「ほんとだ。ぼくももうちょっと考えてくる」とすなおにもうひとくふうしようとする子どももある。

じょうず、へたはあっても、自分で考えくふうしようとする積極的な姿勢だけは共通のものであってほしいと思う。

☆　☆　☆　☆

もう私の手もとから去ってしまった子どもたちに、もっと、ああもすればよかった、こうもすればよかったという思いは尽きない。私の力の足りなかったことをすまないとも思う。しかし、子どもたちは、きっと、それらをのりこえて成長していってくれるにちがいない。

第十七回　幼稚園教育実際指導研究会

主催　お茶の水女子大学文教育学部
附属幼稚園　幼児教育研究会

本年は、例年とは全く異なる様式で本研究会を行ないます。次のような日程で、本園の開園より帰宅までの教育の実際を公開します。

例年の実際指導研究会は、参会者があまりにも多数で限度を越えましたので、人数を制限しなければならなくなりました。そこで、本年のやり方に踏み切ったわけです。事情ご了承の上、ご協力願いとう存じます。

日時　昭和四十三年六月三日（月）から六月八日（土）に至る一週間

第一日　六月三日（月）
第二日　六月四日（火）
第三日　六月五日（水）
第四日　六月六日（木）
第五日　六月七日（金）
第六日　六月八日（土）

会場　お茶の水女子大学附属幼稚園

当日のスケジュール

9：00	各組実際指導
11：30	昼食
12：40	協議会
2：20	
2：30	講演
4：00	

講演（予定・敬称略）

お茶の水女子大学教官

松村康平・平井信義・津守　真・波多野完治
周郷　博・藤永　保・坂元彦太郎

実際指導

一日に行なう実際指導は、三歳児、四歳児、五歳児それぞれ二組、計六組が行ないます。

会員　会員はいずれか一日のみに参加するものとし、参加

人員を申込順により、一日二〇〇名に制限します。

会費　一日につき三〇〇円（研究会要項代を含む。当日お払い下さい）

申込期限　四月二十日より五月十五日まで。但し、各日とも定員二〇〇名になり次第〆切り、以後は、申し込みをおことわりいたします。

申込方法

①　氏　　名
②　勤務園名
③　勤務園所在地
④　参加希望の日
　　第1希望　六月　　日
　　第2希望
　　第3希望
　　第4希望

〔注〕復はがき裏にヨコガキで

・往復はがき一枚につき一名とし、次の様式に従って申し込んで下さい。（文字は楷書ではっきりわかりやすくお書き下さい）

・申込み定員を超過するおそれがありますので、希望の日をできるだけお書き下さい。

・「会員証」に記入してある参会日は、変更しないで下さい。

・復のはがきには、返信先のあて名をお書き下さい。

・復のはがきには、参加日、その他を記入し、当日印を捺印した「会員証」をお送りいたします。

・研究会当日は、必ず会員証（復のはがき）と、会費を受付に出し、研究会要項その他と、き章をうけて下さい。

・なお電話での申込みはおことわりいたします。

申込場所

東京都文京区大塚二の一の一
お茶の水女子大学附属幼稚園　幼児教育研究会

宿泊

ご希望の方は、五月二十日までに、左記つる家ホテルへ、直接申込んで下さい。

つる家ホテル
東京都新宿区下宮比町十三（国電飯田橋駅東口）
電話〔二六〇〕三三三六・三三三七・三三三九

保育の過程（二）

津守　真

幼児保育についての科学的な解明は、まだほとんどなされていないというと過言であろうか。そのなかでも、集団保育において、幼児自身の生活がつくられてゆく過程については、その実態が明らかにされていない。多くのところで、すぐれた保育の実際は存在している。すなわち、そこでは子どもたちは、それぞれの力を十分に用い、新たなことを学び、集団生活のたのしさと生きがいを経験している。しかし、そこには保育者の修練と苦心がある。これは保育者自身の日常的なことばによっては表現しつくされないものがある。そこに保育の過程についての客観的な解明が必要となる。また、それによって、幼児の発達をすすめるような保育に近づくための研究に役立つであろう。

このような意図のもとに、前回より、保育の過程の輪郭を明らかにしようとし、保育の出発点である朝の問題をとり上げた。これが、一、保育の起点であって、その中で、㈠ 子どもの状況、㈡ 保育者の状況、㈢ 保育者が子どもの状況を認知するしかた、について述べた。

今回はそのつづきである。

一、保育の起点（つづき）

㈣ 保育者が幼児と関係を結ぶこと

保育者にとっては、子どもと実際にふれる以前から、保育は始まっている。前日の保育が終ったときから、翌日への抱負があり、夜になり、朝になって子どもとふれるまでに、それはもっと具体的な形をとってくるであろう。そして子どもとふれるときには、子どもの状況をできるだけありのままに認知しようとする心の構えができて、実際に子どもとの接触が始まるのである。

(1) 眼による子どもとの接触

保育者の眼と子どもの眼とが出会ったとき、保育者と子どもとの間に相互的人間関係の第一歩が成立する。保育者は幼児の眼の中に、幼児の精神の動きを見てとる。張りのある状態、あるいは心にわだかまりのある状態などを、眼を通して知ることができる。

幼児もまた、保育者の眼の光によって、勇気づけられたり、あるいは、心の張りを失ったりするであろう。

保育者の眼と、幼児の眼とが出会って、幼児はそれによって安心して自分の活動を開始し、保育者は幼児の心にふれて、その日の精神的、身体的状況を知る。ここに、保育者と幼児との間に相互信頼が成立して、その後の保育の実際的出発点となるといってよいであろう。

眼が人間関係において果たす精神的機能についての科学的研究は少ない。

最近のウォルフの乳児の笑いの研究は、この点で興味深い。彼は出生直後の新生児から観察しており、生後一、二週の新生児ですでに、口もとをほころばせる笑いがあることを報告し、しかも、音をきかせたときに、それは増加することを述べている。第三週になると、物による音よりも、人間の声に対してより多く反応する。

第四週から五週にかけて、笑いに関して著しい変化がおこる。それは、母親の眼と子どもの眼とがあうようになり、そのときに子どもは笑うのである。これが人間に対する笑いの始まりである。これ以前のものは、笑いということばは不適当かもしれず、英語ではこれをグリマス（Grimace）といって、笑い（Smile）とは区別している。

母親の眼と子どもの眼とが会ったときに、人間の最初の社会的行動である笑いが生ずるということは、人間の理解にとって意味のあることであると思う。眼があった瞬間に子どもが笑うと、おとなも笑い返す。すると、子どももまた、それに笑い返して、お互いの間に感情の相互理解が成立するのである。ここに、これから後に発達する人間関係能力や社会性の基盤がある。

子どもの眼と出会ったときに、子どもが笑うと、おとなは、子どもと人間的接触をすることができたよろこびを感じる。多くの母親が、乳児がこの段階に達したときに、子どもを育てるたのしみがわかるようになったということを報告してくれる。保育のよろこびは、子どもとの人間的交流ができるようになったときに生じるものであることがわかる。

眼の機能については、現代の科学の方法を用いていくことによって、もっと明らかになる部分があるだろうと思う。しか

し、ここでもまた、倉橋惣三の詩的表現が、科学の対象とすべき事実をさし示している。たとえば「子どもの目」の中には、次のような表現で子どもの眼のはたらきについて述べている。

「いつも真正面から、真直ぐに相手を見る目」
「いつもあからさまに自分をさらけ出して、心の隅まで隠すところのない目」
「いつも一ぱいに見開いて、しっかり物そのものを見つめる目」
「いつも新鮮さに冴えて興味の心に輝く目」
「いつも柔らかいなつかしい味を湛えている目」
「人の心の明るさを受けて明るく、自らもまた容易に、相手の心の中に溶けてゆこうとする目」

（倉橋惣三選集第三巻育ての心　P24）

幼児と眼を見かわすときに、保育者は幼児の眼の中に、このような幼児の心を見出す。そしてその目にこたえて、次の保育の段階がすすめられる。

保育者の眼については、次のような表現がなされている。

「わたしたちの目にとげはないか。わたしたちの言葉にとげはないか。わたしたちの気分にとげはないか。

もとより自分で心づかぬ時のことである。まさかに、心づいてそんなことのありようはないが、ちらりと光る目、ふと出る言葉、思わず動く気分に、自分でも心づかない峻烈さはないか。

もとより瞬間のことである。直ぐ気がついて急いで取り直さずにはいないが、しかし、とげはいつでもちょっと刺すものである。その一突きが、もう相手の皮膚をやぶっているものである。」

幼児の方から見るならば、保育者の眼に、あるいはとげとげしさを見、あるいは親しさを見るであろう。

幼児に親しさや信頼を感じてくれる眼の光を持つためには、保育者には幼児の前に立つときに、どのような精神の状態で出ればよいのであろうか。自分自身の感情にこだわっていてはならないであろう。幼児に向かって心が開いていなければならないであろう。幼児に対して積極的に温い関心を保っていることが必要であろう。これらのことが集約されて保育者の眼の光になるのである。これは、保育者の側からいうならば、保育者自身が、幼児に向かうときの心の構えとして、日々くふうし、自分自身で訓練する問題である。また、他方、眼は心の窓であるといわれていることの、科学的解明を必要とする問題であると思う。

(2)　身体による子どもとの接触

朝、保育者が幼児とふれるとき、幼児の手を握り、あるいは、幼児の肩に手をおいて肉体的接触をすることによって、保育者と幼児との間の相互交流がすすめられることが考えられる。眼を見かわすだけでなく、一歩すすんで、身体的接触をすることによって、親しさはいっそう増すであろう。入園当初においては、幼児を抱きかかえ、背中に負うなどすることによって、幼児は母親から離れて保育者に親しむことができるようになる場合もある。また、保育者のスカートにつかまったり、よりかかったりして、あとをついて歩くものもいる。

欧米においては、人と人が会って、交際をはじめるときに、握手して眼を見合わすことは普通のことである。日本の習慣には握手することがないので、保育者と幼児とが手をふれることもまれであるかもしれない。しかし、握手というような形で身体接触をするときに、人間関係に何か質の異なったものが生まれないであろうか。(このことについては、いまのところ、私には断言することはできない。)

乳児保育において、身体的接触が重要であることは、すでにホスピタリズムの諸研究によって多くの資料が提出されている。抱いたり、ほおずりしたりして愛撫することが、乳児に安定感を与え、対人関係を親和的なものにする。そのことがひいては、精神的諸機能の発達に良い影響を与える。

幼児保育において、手をふれたり肉体的接触をすることがどのような作用をするのか、科学的な資料はいまのところ見当たらない。しかし、幼児と挨拶するときに、保育者が幼児の手を握ると、何か親しみの感情が湧くことを多くの保育者が経験している。また、みんなで輪になったときに、手をつないで輪になったときに、全員の間に一体感や親しみがいっそう感じられることも、多くの人びとの経験するところである。これが身体的接触のみによるものであるか、それともっと他の要因によるものであるかは明らかでない。ただ、保育の起点において、身体的接触が、保育者と幼児との間の人間関係をつくるのに、何らかの作用を果たしているであろうと考えられるのである。

(3) ことばによる接触

保育者が子どもにことばをかけるということも、保育関係の出発点において、たいせつなことである。

何でもよいから、ことばをかけることによって、子どもは保育者から関心をもたれていることを知ることができ、保育者と子どもとの間のつながりができる。また、子どもが保育者になれていない段階ではとくに、保育者がどのようなことを考えており、保育者からどのようなことを期待されているかを子どもが知ることができる。保育者と子どもとの間に緊張が感じられ

ているときには、声をかけることによって緊張が減少する。

それでは、保育の起点において、どのようなことばをかけることが、その後の保育の発展にどのような作用を与えるものであろうか。

第一には、子どもとの間に親和関係をつくるためのことばである。たとえば「〇〇ちゃん、おはよう」「きょうはうれしそうね」とか、親しみの感情から出たものであれば、たいがいのことばが役立つであろう。

第二は、その日に子どもが幼稚園にくるまでの経験を知るためのことばである。たとえば、子どもが手に何か持ってきたときに「おもしろいもの持ってるね、どこで見つけたの」などとたずねる。ただし、これは、せんさくではない。保育を発展させるために、子どもの経験を知ろうとするけれども、すべて知ることは不可能であり、また必要でもない。かならずしも、子どもの経験を知らなくても、それを生かすことができる方法があるであろう。子どもの経験を生かして、そこから活動をすすめるためのことばが、保育の起点において必要なのである。

第三には、保育者の考えが伝えられるためのことばである。保育者のその日の意図がひとこと加わると、子どもの活動が方向づけられるのに具合のよいことがある。しかし、この場合のことばは大へんむずかしい。子どもの活動をそれによって束縛することもある。保育の起点におけることばのかけ方が、その日の保育をよい方向に向けるのにどのような作用をなすかということも、今後研究すべき課題であろう。

(4) 子どもの側からみるならば、自分と生活を共にしてくれるおとながいるという安心感、いっしょに遊べるおとながいるというたのしさが与えられること

上に述べた保育者の機能は、幼児の側からいうならば、この一点に集約されるであろう。朝、保育者にふれたとたんに、幼児は、きょう一日自分と生活を共にしてくれるおとなの存在を温かく感じるならば、幼児は安心して自分の生活にとりくんでいく構えができるであろう。また、きょう一日いっしょに遊べるおとながいることを感じるならば、あんなこともしてみよう、こんなこともしてみよう、先生もいっしょにさそってしてみようという気持ちの高まりができてくる。途中でどこかにいってしまうかもしれないおとなだと思ったときに、幼児の心は、そのおとなに対しては全面的には開かれないのである。いっしょに遊べる相手だと思うときに、実際にはおとなを相手にする遊びはほんのわずかで、自分たちの活動が展開していくのである。

(五) 環境、材料の準備

保育の起点において、物的環境の作り方、材料の出し方は重要な役割を果たす、子ども自身の活動がしやすい環境と、しにくい環境とある。すでに与えられた保育室の空間は、日によって変更することのできないものである。しかし、保育室の空間（大きさ、形等）は子どもの活動の場であるので、幼児の活動に適した保育室と園庭の条件については、より系統的な研究を必要とする。

一日の保育についていうならば、与えられた空間の中で、物の配置をかえることができるし、廊下の用い方、隅や裏庭の用い方などによって、すでにあるものの意味をかえていくことができる。幼児にとって、はいっていける場所、自分が遊べる場所がたくさんあるという認識は重要である。一歩、園外に出れば、危険なものが多く、幼児にとっては自由にならない環境である。しかし幼稚園の中では、幼児が自分の力をためすことができ、自分で思うところにいくことができ、自分で物を動かすことができ、手にとって見ることができるという自由感が必要である。そこに、規模の大きな活動の成立する可能性ができてくる。

また、材料はその日の活動の素材となっていくので、保育者がどのような材料を選んで、どのように出しておくかということが、その日の保育をきめていくのに重要な要因である。ここに、その日の保育に対する保育者の見通しが反映する。材料の選択と準備は、保育が出発するときには、すでに保育者によってととのえられているものであるから、保育の起点以前の問題として考えるべきものであるかもしれない。

材料の出し方にもいろいろの場合がある。多くの物を出しておく場合、物は最小限にしておく場合、つくりかけ、遊びかけの状態で出しておく場合など、どのような出し方をするかによって、この次の保育の展開の状況がかわってくる。

環境および材料については、多くの課題があるが、今日は、保育者と幼児との間に成立する保育の過程を中心としていきたいので、次に進むことにする。

二、模索の段階

幼児が登園して、保育者と出会ったところから保育が始まるが、幼児が本格的に自分の活動ととりくむまでには、時間的経過を必要とする。そこで、子どもの側にも、いくつかのふむべき段階があるように思うし、保育者の側にも、それに応じた心の構えと保育の技法があるように思う。

もっとくだいていうならば、外からみると幼児は同じように遊んでいると見えても、朝、登園して間もないころの遊びと、

十時半か十一時ごろ、遊びが軌道にのったころの遊びとは、活動の質が違うのである。幼児が活動に没入して、自分の活動に定着しているときの遊びは、内容にも変化があり、幼児にとって新しい学習や発見がある。それに対して、登園して間もないころの遊びは、以前からの活動のくり返しであったりして、とくに新しい遊びは見出されない。しかし、一歩進んだ活動をするためには、その前段階として、この混沌とした低次の遊びの時期を必要とするのである。*1 この間に、幼児は、きょうはだれと、どんな活動にならとりくめるかなどを模索している。そこで、この初期の遊びの段階を、模索の段階と名づけた。次に、この模索の段階では、幼児と保育者との間にどのようにことが行なわれているかを明らかにしてみたい。

*1　この部分は、磯部景子との会話により、示唆されたものである。

(一)　幼児は、そこで活動できるための感情の安定を求めて、依存的になる。

朝、幼児が登園してしばらくの時間は、保育者に話しかけたり、保育者のそばに寄ってくることが多い。また、ひとつの活動が軌道にのって、発展がみられるようになる以前の段階では、保育者への接触が多い。

このことは、ひとつの遊びの始まったときから、それが発展して終わるまでの経過を観察することにより、容易に知られる。また、多くの保育者の保育経験からも、このことがいえる。とくに朝のうちの活動に典型的なものがみられるし、入園当初の時期には、とくに著しい形であらわれる。

そのときに、保育者が依存行動にこたえて、幼児が安心感をもつことができると、幼児はそこで自分の活動を見出して、それを発展させていくことができるようになる。もしも、幼児が保育者に何かを求めても、保育者がうるさがったり、拒否したりすると、幼児はそこで遊んでよいのかどうかわからず、保育者の傍にいつまでも寄ってきたり、落ちついて遊びにはいることができなくと、依存行動からぬけ出すことができない。

次にいくつかの事例をあげてみよう。

ある四歳児のクラスの三学期

登園した子どもが、種々の色の紙テープを並べ始める。

先生はその子たちと話しながら、後についてくるAに笑ってみせる。

先生「B子ちゃん」とぼんやり立っている女児にほほ笑みかける。B子笑ってひき出しをあける。……

先生、自由画をかいている子たちに、はなしかける。

先生「おはようございます」と登園した子の頭へ手をおく。
先生「こんにちは、今二人でいますからカラー写真とって下さい」とA子の手をとって写真屋の前へいきこしかける。
A男「ここ見なさい」と看板をさす。
先生「おわり、やすみ」と看板のところにかかれた文字をよむ。
自由画をかきながら「わはっはっはっ」と笑いながら先生を見る子どもたちがいる。
B子「これと違うの」とC子の絵と自分の絵とを見る。
先生「そうね、ちょっとにているわね」

これは、登園してから約二十分間の記録の抜粋である。（もとの記録が、幼児の教育、61巻5号、P34、昭和37年に掲載してあるので、ここに引用した）たえず先生に話しかけてくる子どもの姿をみることができよう。

ある年少児のクラスの例
S「オーイ」と庭から先生をよぶ。
先生「なあに」と声をかける。
Kは三輪車を走らせていて、ブランコの後にひっかかる。
「オーイ、せんせい」と先生をよぶ。
先生「うごかないの」とそばにいってやる。
Yは砂場で容器をひっくりかえすと、きれいな型がぬける。
「ほら」と先生をみると、先生は笑いかえす。
Oは三輪車を動かしていて動かなくなる「せんせい」とよぶ、先生「ちょっとまっててね、すぐいくからね」というが、しばらくすると、自分で動かせるようになる。
S「せんせい」と先生のそばにきて手をひっぱる。先生は要求がわからないままに、いっしょに砂場にはいり、砂をいじっているうちに、ひとりで遊びはじめる。

これは、入園して間もないころの約十分間の記録である。先生はあちこちからよばれて、あちこちに気を配っている。しばらくすると、めいめいが遊びはじめる。

この二つの例にみるように、年少児ほど、また、入園当初ほど、保育者に対して依存的である。五歳児の朝の記録が本誌61巻1号に掲載されており、朝きたときからどんどん自分たちで遊びはじめるようすをみることができるので参照されたい。

いま、ここに、幼児が自分自身の活動をするための重要な条件として、幼児の依存性を保育者が受容することについて述べた。このことを、保育者の側からいうときには、ただ受容するというだけではいいきれないものがあるように思う。幼児の依

存性を受容することができるためには、そのときの幼児の心にふれることができるような心の構えが必要である。そこのところを、もっと科学的に分析することも可能であろう。この点について、また、倉橋惣三の文章を引用しよう。この例は、ここにあげた依存性の場面とはすこし違うのであるが、保育者のうけとめ方の問題としては共通のものを見ることができると思う。

「子どもが飛びついて来た。あっと思う間にもう何処かへ駆けて行ってしまった。その子の親しみを気のついた時には、もう向こうを向いている。私は果たしてあの飛びついて来た瞬間の心を、その時ぴったりと受けてやったであろうか。それに相当する親しみで応じてやったろうか。

後でやっと気がついて、のこのこ出かけて行って、先刻はといったところで、活きた時機は逸し去っている。埋めあわせのつもりで、親しさを押しつけていくと、しつこいといったようの顔をして逃げていったりする。某の時にあらずんば、うるさいに相違ない。時は、さっきのあの時であったのである。

いつ飛びついて来るか分からない子どもたちである」

（倉橋惣三選集　第3巻、　育ての心「飛びついて来た子ども」P40）

依存性を受容するということのさらにその奥にある心の構えはどのようなものであるかを、この文章は指し示していると思う。

（つづく）

日本幼稚園協会主催

幼児教育講習会（予告）

期　日　昭和四十三年七月二十二日（月）—二十五日（金）

場　所　お茶の水女子大学講堂及び体育館

第一部　午前九、〇〇—一二、〇〇　講演

第二部　午後一、〇〇—四、〇〇　リズム講習

講師名、演題等は次号でお知らせします。

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
日本幼稚園協会

五歳児の記録⑫

二学期

磯部景子

十月九日　金曜日　雨

ぬいぐるみの動物とあそぶ
オリンピック用の旗ができる
帰る時のあつまりの時に先生が「みつばちマーヤの冒険」をよむ

保育室の壁に、運動会の絵がはってある。

保育室の入口のところにダンボールの大きい箱がおいてある。その箱の中にはマジックの空箱がたくさん入っている。

テレビの前の机の上に緑色のかごがふたつおいてある。かごの中には毛のふさふさしたぬいぐるみの犬が二匹ずつ入れてある。かごのとなりに洋服をきたキューピーがおいてある。

遊具入れのかごの中に新しいなわとびのなわが入れてある。

保育室の中ほどの机の上に新聞のオリンピック版がおいてある。

八時五十分

⓪が犬の首輪についている鈴をならしている。
⑪が犬を入れてあるかごを持って歩いている。

男児が四、五名、机の上においてある新聞のオリンピック版の国旗をみながら、「ウルグァイ」「チリ」などの国の名前をいっている。

九時

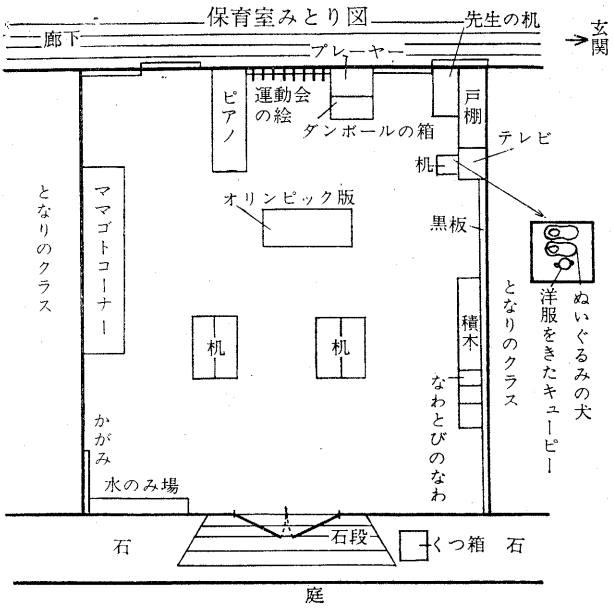
自由絵　女児六名

箱つみ木　男児三名（E、N、C）

Ⓡ、Ⓝ、Ⓘが三人で手をつないで保育室に入ってくる。

先生は三人をみて、

「三人いっしょで、よかったわね」という。



Ⓤと Ⓡがぬいぐるみの犬をだいている。

首輪の鈴をならす。

Ⓙ、Ⓞ、Ⓤの三人が保育室で鬼ごっこをはじめる。

九時十五分

男児がオリンピックのメダルの獲得表を囲んではなしをしている。

先生も加わってはなしている。

先生はままごとコーナーの壁にオリンピック版をはる。

九時二十分

ままごとコーナーであそぶ

Ⓘ、Ⓔ、Ⓞ、Ⓢ

本をよむ

Ⓓ、Ⓙ、Ⓗ、Ⓝ

保育ブロックであそぶ

N、C、E、O、M、D、B

十時五十分

廊下

鬼ごっこ

男児五名（R、H、D、他）

鬼のみないうちに動くあそび

だるまさんごっこ（ぬいぐるみの犬をだいている）

女児六名（Ⓙ、Ⓕ、Ⓒ、Ⓘ、Ⓝ、Ⓜ）

十一時

保育室

くみ板で車をつくっている

男児四名　女児一名

（E、N、T、O、Ⓑ）

自由絵

女児一名（Ⓡ）

先生を囲んで旗をつくる

男児三名、女児二名

（Y、I、M、Ⓞ、Ⓤ）

先生はひごを十字にくんで、子どもたちがかいた旗を糸につないで糸をひごに結んでスタンドピアノの上に固定する。

廊下

ラケットをなわとびのなわでゆわえ、その上にぬいぐるみの動物をのせて、つなをひっぱってリレーをする。だんだん人数が多くなり女児が全員参加する。

保育室の前から玄関まで走っていって折りかえしてくる。

一時半

おかえりのあつまりのときに、先生は「みつばちマーヤの冒険」をよむ。

ぬいぐるみの犬となわとびのなわと、新聞のオリンピック版を中心に展開した活動を中心に記録をみると次のようになる。

ぬいぐるみの犬を中心にして展開した活動

保育室

朝、女児が時々ぬいぐるみの犬をだいたり、犬の首輪についている鈴をならしたり、犬をみどりのかごに入れたまま、かごを持ち歩いたりしている。

ままごとコーナーに犬をつれていく。だいたりかごに入れたりしてままごとあそびをする。

廊下

十一時頃　犬をだいて廊下に出る。犬をだいたまま「だるまさん」をする。

犬の首になわとびのなわをゆわえて犬をつれて歩く。子どもが歩きはじめると、犬はすぐにたおれてしまう。たおれるたびにしゃがんで犬をおこす。

先生が子どもたちのしていることをみている。先生はなわを犬の足にゆわえてみる。先生がためしにひっぱってみる。犬はたおれない。

先生「これなら、いいわ」という。子どもたちはつなを犬の足にゆわえて、歩きはじめる。先生は子どもたちがするのをみて保育室にいく。

子どもたちは犬をひいてしばらく廊下を歩いている。

やがて犬をひっぱって走りはじめる。

犬をひっぱって走るリレーがはじまる。

次にバトミントンのラケットを保育室から持ってきて、ラケットになわをゆわえて、ラケットの上に犬をのせて走りはじめる。

他のあそびをしていた子どもたちが廊下にきてみている。先生も保育室から廊下に出てくる。

「入れて」といって子どもたちが入ってくる。人数がだんだん多くなる。

子どもたちは保育室にいって以前から保育室においてあったぬいぐるみの、うさぎ、ぞう、りすなどを持ってきておおぜいでリレーをする。

女児全員が参加する。

新聞のオリンピック版を中心にして展開した活動

保育室

先生は子どもの机に向かって新聞のオリンピック版のふちをセロテープではって丈夫にする。

男児が四、五名、新聞のオリンピック版を囲んで、オリンピック版の国旗をみながら、その国の名前をいっている。

先生が子どもたちに加わる。オリンピックのメダルの獲得表を囲んでみんなではなしをしている。

先生は新聞のオリンピック版のメダル獲得表をままごとコーナーの壁にはる。

十一時頃からオリンピック用の旗つくりがはじまる。大きさはB5判である。（運動会の時の万国旗の二倍の大きさ）

先生はひごを十字に組む。先生は子どもたちが、かいた旗の両端に糸をつけて旗をたてにつなぎ、長くつながった旗をひごにむすびつける。それをスタンドピアノに固定する。

十月十日　土曜日　晴

非常によいお天気になる。

先生は子どもたちをさそって庭に出る。

九時四十分から帰るときまで先生も子どもたちもほとんどずっと庭であそぶ。

庭のあそびは前半は砂場で「ひょっこりひょうたん島」づくりが活発で、後半は二人三脚がさかんになる。

九時二十分

保育室

女児三名が絵をかいている。

遊戯室

男児八、九名、女児二、三名がかたまっている。

女児ひとりが保育室からバトミントンのラケットをたくさん持ってくる。

男児たちはそれぞれ、女児からラケットをうけとって、

「こうげき」などと口々にいいながら遊戯室内をかけまわる。

砂場

男児五、六名と女児七、八名が別々のグループになって熱心にあそんでいる。

男児は「ひょっこりひょうたん島」をつくっている。島のまわりに堀をつくって水を流しこんでいる。

九時三十分

先生はタオルを点検したり、室内の整備をして庭に出る。

先生は砂場の子どもたちの腕をまくったりして子どもたちが活動しやすいようにする。

九時四十分

先生は遊戯室にいく。

遊戯室にいた子どもたちは先生といっしょに保育室に帰ってくる。

男児はそのまま庭に出て、砂場のあそびに加わったり、ぶらんこにのりにいったりする。

女児は石段のところに立って他の子どもたちがあそんでいるのをみている。

先生「さあ、なわとびでもしましょうか」といいながら、先生はなわとびのなわやリレーのバトンなどの遊具の入ったかごを保育室から運び出す。

Ⓢは新しいなわとびのなわをみて、

Ⓢ「外でやってもいいの？」と先生にたずねる。
先生「ええ、いいわよ」という。
女児たちもなわとびのなわを持ったり、まりを持って庭に出る。

先生は砂場にいく。
砂場の子どもたちのエプロンが前へたれさがらないように、うしろを洗濯ばさみでとめる。
先生は砂場にいる子どもたちをみながら、
先生「今日は女の方たちもいっしょでお手伝いができていいわね」
という。
砂場の子どもたちは「ひょっこり、ひょうたん島」のテーマソングをうたいながら、島をつくり続ける。

先生は庭をひとまわりみわたす。
先生はつり輪のところにいって、つり輪に両足をかけて、のろうとしている女児のためにつり輪の長さを調節する。
砂場にもどり、砂場のすみで型をぬいてお菓子屋さんのあそびをしているⒹのところで、ごちそうを食べながら、Ⓓとはなしている。
Kが保育室の前でなわとびをしている。

K「せんせい、いっぱいできるよ。みててごらん」
先生「そうお」といってKがなわとびをするのをみる。
先生「あら、Kちゃん。そのなわとび、やりにくくない？こっちの方が長いわよ」と長いなわを持ってくる。
K「うん、大丈夫。ぼく、これでなれているんだもん」といってとんでみせる。
先生「あら、ほんとうねえ。じょうずねえ」といって、Kがとぶのをみている。

Ⓓが先生のところにくる。
Ⓓ「せんせい、ごちそうできたの。食べにきて」
先生「はい、はい、できましたか？」と砂場にいく。

先生「さっき、Hちゃんたちはどこにいったのかしら」とひとりごとをいって庭をみわたす。それからつり輪のところにいく。
先生はつり輪のところで、なわとびのなわを持っている子どもたちとはなしている。
先生はその女児のひとりとなわとびのなわで足をゆわえて二人三脚をして庭を走る。
女児たちが、二、三人、うしろから走ってついていく。
先生はなわとびのなわで、ついてきた女児たちの足をふたりずつゆわき、二人三脚ができるようにする。

砂場でお菓子屋さんのあそびをしていた女児たちも、なわを持ち出して、二人三脚をはじめる。
先生「いち、に、さん、し」といいながら、先生も、子どもも庭を歩きまわったりする。

Ⓗが先生にすがりついてくる。
先生「じゃ、Ⓗちゃんと先生もしましょうか？できるかしら」といって、なわとびのなわを保育室から出してくる。
Ⓨ「せんせーい、ほどけちゃった」
先生「ああ、ほどけちゃったの？じゃ、Ⓗちゃん、ちょっと、これ持っていて」といって持っていたなわをⒽにわたして、Ⓨたちのなわを結びなおす。
先生はそれから、Ⓗと足を結びあわせる。
Ⓨ「あっじゃあ、きょうそうしよう、ね」という。
先生「ちょと、まっててください。少し、れんしゅうしましょう」といって
先生「いち、に、いち、に」とかけ声をかけながら、Ⓗと歩き出す。
そうしているうちにⒽの相手がみつかり、先生はⒽたちの足を結ぶ。
先生は新たに加わったⓄと足を結んで歩き出す。
Ⓙたちが加わる。
Ⓙ「せんせい、わたしたちもする。むすんで」といってなわとびのなわを持ってくる。
先生「ああ、これね、たすきがいいんだわ。これだとやってるうちに、足がいたくなるわ。たすき、まだおいてあるでしょう？」
Ⓙたちは保育室にたすきをとりにいく。

Ⓑがぽつんとみている。先生はⒷが来ているのに気づく。
先生「あ、じゃあ、Ⓞちゃん、Ⓑちゃんとやったらいいわ」
Ⓞ「うん、Ⓑちゃん、やろう」

先生は、なわとびのなわで二人三脚をしている子どもたちに、たすきの方がよいことを教える。
先生は保育室にいく。
女児たちは次々と保育室にたすきをとりにいく。

女児たちはたすきで足をゆわえている。そのうち、みんないっしょにつなごうと話がまとまる。
Ⓢ「こんなに長くして、せんせい、わらわせようね」
Ⓨ「うん」
女児たちはおもしろそうにわらって九人横に一列に並んで足をむすぶ。
みんなで歩こうとするが全然歩調がそろわない。
先生が保育室から出てくる。
女児がずらりと横に並んでいるのをみて、

先生「おや、おや、まあ、それはむずかしいでしょう」と笑いながら、みんなのところにいって、みんなの前にしゃがむ。
先生「いちの時、これとこれとこれとこの足を出して、その次にこれとこれと……の足を出すのよ」と手で子どもたちの足をさわりながら教える。しかし、子どもたちはなかなかできない。

Hが先生のところに来る。
H「せんせーい、なわとびするの、どこにある?」
「そこよ、ほら、そのかごの中」といってかごをさす。

先生のところに、子どもたちがぎんなんをとりにいくといって来る。
先生はその子どもたちにわり箸と容器をわたす。
九人十脚の女児たちはうまくいかず、二人や三人のグループに分かれる。

蚊にさされた子どもが先生のところに来る。
Ⓐ「せんせい、さされちゃった」
先生「あら、まあ、あなた、どこで」
Ⓐ「てつぼう」
先生「ああ、あそこね。まだいるのよ。先生もさっきさされちゃったのよ」

先生とⒶは保育室に入る。
先生はⒶにくすりをつける。
Ⓝ「せんせーい、ちがでちゃったの」とふしをつけて、おどけたようにいいながら⒩が保育室に入ってくる。
Ⓝ「二回ころんだけど二回目は大丈夫だった」
先生は⒩にくすりをつける。

砂場にいた男児たちも、だんだん砂あそびをやめて二人三脚や三人四脚をはじめる。

Ⓚがぎんなんを集めているうちに、小さいぎんなんをみつけて、箸でつまんで見せに来る。
Ⓚ「せんせーい、ほら、ぎんなんの赤ちゃん」
先生「まあ、ほんと、じゃ、そのふくろの中に入れときましょう」といって、ぎんなんを集めてある袋を指さす。
先生「さっき、Hちゃんたち、三人でしようとしてたけど大丈夫かしら。できたかしら」とひとりごとをいって庭を見まわす。

ⒷとⒻが二人三脚をしていてころぶ。
ⒷとⒻがいっしょに先生のところに来る。
Ⓑ「せんせい、ころんだけど、なんともなかった」

Ⓕ「わたしも、大丈夫だった」
先生はⓈとⒻがいっているのをきいて、わらいながら、
先生「ああ、そうね、ふたりいっしょにころんじゃったのね」という。

三人四脚をやっていた子どもたちが先生に見せに来る。
先生「まあ、まあ、じょうずねえ、ほんとだわ」といって見る。
子どもたちは三人四脚で走っていく。

先生はビニールの袋に集めてあったぎんなんを、小さなバケツに入れて箸でつついてつぶす。

Ⓞがままごとを手にいっぱいだきかかえて保育室から出てくる。
Ⓞ「せんせい、ちょっと、これ、あそこの鉄棒の下までもってってよ」
先生「どれ？それを？先生の手、ほら、これ、ぎんなんでよごれてて、くさいけど」
Ⓞ「あ、じゃ、いいや」

女児、四、五人、保育室に入って絵をかいたり、保育ブロックであそびはじめる。

先生は、たたきつぶしたぎんなんを水で洗って、ひあたりのよいところに出してひろげる。

保育ブロックであそんでいたⓈが保育ブロックを持って、先生のところに来る。
Ⓢ「せんせい、これ、とれない」
先生「とれないの？待ってね。今、先生、手を洗うから」といって先生は手を洗って保育ブロックをはずす。

十一時五分

先生「そろ、そろ、お片づけしましょうね」と当番の子どもにいう。
「やーまのくーみ、おかたづけ」と当番の子どもがふしをつけてあちこちにいって歩く。

先生は子どもたちといっしょに砂場を片づける。

鉄棒の下でままごとをしていたⓄたちが荷物を自動車につんで走ってくる。

Ⓚが子どものうちから走ってくる。
Ⓚ「子どものうち、てつだって、子どものうち、てつだって」とふしをつけて、ままごと道具を片づけている女児たちにいう。
ままごと道具を片づけている子どもたちは、だまって、ままご

と道具を片づけている。
Ⓚは走って、子どものうちにいく。
先生「Ⓚちゃん」と先生はⓀを呼ぶが、Ⓚは気づかないで走っていく。

先生は砂場を片づけ終ってから、Ⓚがいっている子どものうちを見にいく。
先生はⓀたちが片づけているようすをみとどけて帰ってくる。

先生は庭を見わたす。
先生は遠くのすべり台のところになわとびのなわがおちているのを見つける。
先生「あの、すべり台のところにあるなわとびはどうしたの?」
Ⓝ「あれ、川の組のなの」
先生「それじゃ、持っていってあげましょう」
Ⓝは走っていって川の組にとどける。

先生は砂場でよごれたDの運動靴をふく。

先生は保育室に入ってくる。
片づけをしないで立っている子どもたちに、
先生「Ⓢちゃんたちもお手伝いしてあげてね。ああ、Ⓜちゃん、まだ、ままごとが、自動車にのこってるわ」

先生はこわれたままごとのお盆をセロテープで修理する。
先生「Ⓙちゃん、これ、なおったわ、子どものうちの」

男児がふたり、庭で、まだ、二人三脚をしている。
I「せんせーい」という。
先生はIたちをみて、
先生「さあ、Iちゃんたちも、もう足をはなして、お片づけしましょう」という。

先生「これも、きちんとしなければね」といって、かごに投げ入れてあったなわとびのなわを一本、一本、きちんと結ぶ。
先生の近くにいた数人の子どもが手伝う。
Iは足にむすんであった、たすきをほどいて保育室に帰ってくる。
先生はIをみて、
先生「たすきをきちんとたたんで、しまっておきましょうね」という。

男児が立ってはなしているのをみて、
先生「男の方、ほら、そこに、まだ少しブロックがのこってるわ」とうながす。

子どものうちを片づけていた子どもたちが帰ってくる。

Ⓕ「せんせい、子どものおうち、きれいになった」

先生「そうお、どうもありがとう。あそこのままごとも片づいたわね。ああ、積木もきれいになったー。じゃ、おかえりのしたくをしましょう」

子どもたちはバスケットなどをとりに廊下に出る。

子どもたちが帰りじたくをして保育室に入ってくる。

先生はオリンピックの予定表を持っている。

先生「これ、どこにはろうかしら、あしたからのだけど」と、ひとりごとをいいながら、保育室を見まわして、ままごとコーナーにいく。

昨日はったメダル獲得表のとなりにオリンピックの予定表をセロテープではる。

先生「今日はてぬぐいを持っていってちょうだいね。てぬぐいは外にありますよ」という。

子どもたちは手ぬぐいを持っていすにすわる。

先生は「みつばちマーヤの冒険」の本を持っていすにすわる。

先生「さ、じゃあ、きのうのつづきね」

B「にんげんがでてきたところまで」

先生「そうね、じゃ、そのあとね」

先生は本を読み出す。先生はどんどん読んでいく。

子どもたちに絵をみせない。解説も加えない。（五歳のため、四歳ではちがう）

子どもたちはしずかにききいっている。

先生は読み終わる。

先生「さ、じゃ、ここまでね。つづきはまた、月曜日ね。今度は、きっとたたかうんでしょうね、くまばちと」

先生は子どもたちをみまわして、

先生「てぬぐいをみんな持ちましたね。今日はこんなにお天気がよくなってよかったわね。今日からオリンピックが開かれるのね。でも今日は開会式だけで、競技はきっとあしたからね。いかれる方はいいけどきっといかれない人の方が多いんだから、みんなテレビをよく見てちょうだいね。せんせいも、いっしょうけんめい、テレビをみるわ。じゃ、お当番さん」という。

当番が男女、各一名ずつ出て来て、皆の前に立つ。

当番「さようなら」

先生も子どもたちも

「さようなら」という。

（お茶の水女子大学）

幼稚園の問題いろいろ

〈2〉

以上のような問題をここで考えてみたいと思います。

声のかけ方

数人の子どもたちが、製作のコーナーで、各々の作品にとりくんでいます。一人の子どもが、先生のそばに行き、

「せんせい、ライオンつくる」

先生は、紙を渡し、材料のおいてある所を示しました。材料をいじりながら、その子は、

「ぼく、ちゃんと立つライオンをつくるんだ。でもつくり方わからないんだもの」

先生は、動物の絵本を棚からとり出して、

「これ、見たら。それから箱を使うんだったら、あの戸棚の中に入っていますよ」

といって、他の子どものところに行ってしまわれました。しばらくしてその子どもは、ライオンをつくり上げて、先生のところに見せに行きました。

先生は、ちょっと「せんせーい」と外からよぶ声に気をとられて、ちょっと見て、

「そう、よくできたわね」とおっしゃっただけで、その場は、終ってしまいました。

もし、子どもが、つくり方をたずねたとき、その同じ問を今度は、先生が他の子どもたちにむけ、たとえば、

「○○ちゃんは、立っているライオンをつくりたいんですって。どうしたらちゃんと立つライオンができるでしょうね」と、提案してみたら、結果は、どうなったでしょう。他の子どもにも考える機会を与えたことにもなりますし、その子どもも、その製作コーナーの一員として、改めて認められたことになったでしょう。単に、子どもに材料を提示するための話しかけに終わらずに、その子どもだけでなく、他の子どもにも発展するような話しかけがなされることは、大切なことです。

○教師の話しかけについて

- どんな意味をもつのか
- 子どもにどんな影響を及ぼすか
- どんな話しかけが、子どもの遊びを発展させるのか

時として、子どもは、すぐれた創造性を示します。その素晴しさをとりあげることも、先生の声のかけ方によります。それをもっと伸ばすこともできますし、そのままで、終わらせてしまうかもしれません。また、先生の声のかけ方によっては、他の子どもにも、新しいものをつくりだすきっかけを与えることになります。

機会をとらえる

誰も砂場で遊んでいないのをみつけて、一人の男の子が、道具置場から汽車を出してきました。そして、砂場のふちにそってぐるっと長い線路をえがき、

「ピー、ポー、大阪行き」といいながら、ひざをついて、汽車を動かし始めました。そこへ鬼ごっこにあきた他の組の子どもが、シャベルをもってやってきて、その長い線路の上をふんで砂場の真ん中のあいた所にいこうとしました。

すると汽車を動かしていた子が、

「ふむなよ！これぼくの線路なんだよ」

「だって、ぼく山つくりたいんだ」

「でもだめ、入っちゃだめだよ」

と、いい合いになりました。

そのとき、

「ずいぶん長い線路が、できたのね。お山もできるの。どんなのができるか楽しみね」といいながら、先生が、ニコニコしながら、通りすぎていらっしゃいました。

二人は今争ったことも忘れたかのように、一人は、

「ピー、これ新幹線だぞ」といいながら、ものすごい勢いで砂場を一周し、もう一人は、

「高い山にするんだ。ぼくずっと前に山に登ったよ。それに新幹線だって乗ったことあるもん」

二人は、それからしばらく、何かいいながらそれぞれの遊びに満足しているようすで遊んでいました。

ここでは、先生の一言がこの二人を結びつけ、満足して遊びを続けるさせることになりました。けんかになってから、同じことをいってもこのような結果はでてこなかったでしょう。ちょうどよい機会をとらえることは、むずかしいことですが、とても大切なことです。

教師の態度

話しかけをする際の教師の態度は、大きな意味をもつと考えられます。なぜならその話しかけが、子どもに受け入れられるか、否かを左右させるからです。あまり計画に追われたり、心にゆとりがないと、教師の態度全体に表われてきます。そして、しらずしらずのうちにかたい感じで融通性のない態度をつくりあげます。

子どもは、毎日、少しずつ成長しています。おとなももっと意欲的に活動し、学ばなければなりません。教師によらず、子どもに接するおとなは、常に心を広くもち、ゆとりある態度をもち続けたいものです。

（編集部）

四月に入園した幼児

入園式の前は、たいがい幼稚園をたのしみにし、待っている。

入園式がすんで、一月、二月とたつうちに、それぞれ、いろいろのことがあって、入園の前のたのしさや期待が破られる。子どもなりに、夜、ねられなかったり、夜中に泣いたり、朝、起きるのも気が重かったり、怒りっぽくなったり、いろいろである。新しい世界にはいって、ある程度の緊張は、だれにも避けられないものである。

けれども、教師のひとこと、一つのふるまいが、幼児の心の負担を重くしたり、あるいは軽くしたりする。幼稚園から帰ってきてからの母親のひとことが、その負担に拍車をかけたり、あるいは、軽くするのに役立つ。こう思うと、幼児にふれるおとなの心づかいは、なかなか大へんである。それだからこそ、専門の教育をうけた教師を必要とし、また、幼稚園の教師は、たえず自分自身を訓練する機会を必要とするのである。

こうして、一月たち、二月たって、どの子どもも幼稚園に馴れたように見え、適応したようにみえても、幼児の内面の生活はいろいろである。幼稚園生活のなかに、よろこびと生きがいを見出しているものは幸いである。いやがらずに行っていても、その心に張りを失っている子どもには、何を与えたらいいかを、一しょうけんめい、考えなければならない。

現場の実践的な仕事は、次から次へと、さまざまな現実的問題がおしよせてきて、そこで問題として感じたことを、十分に考える時間も余裕も与えてくれない。現場の仕事は、それを研究する役割りを伴わないと、進歩しないのである。幼稚園の現場は、全国にふえつつあるのだが、幼稚園研究の場はすこしもふえていかない。もっと、幼稚園研究をする人が、現場の内外に必要であるし、幼稚園研究の機関がふえなければならない。

それでなければ、幼児教育はいつまでたっても同じことをくり返していくであろう。

幼児の教育　第六十七巻第六号

六月号　©　定価八〇円

昭和四十三年　五　月二十五日印刷
昭和四十三年　六　月　一　日発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所　凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

申込書

なつの　おともだち　①（年少用）　②（年長用）

冊　冊

申し込みます。

昭和　年　月　日

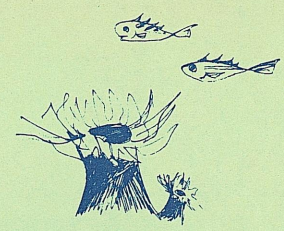
（おところ）

（おなまえ）

フレーベル館　御中

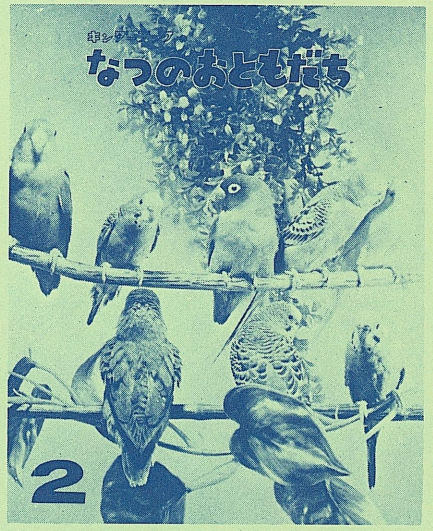
㊞

なつに豊かな経験を……



ことしは判が大きくなりました！

（１）年少用……定価100円



（２）年長用……定価100円

なつのおともだち

●ことしのテーマは「観察と経験」です。
よく見よう、やってみようがテーマです。幼児の夏の生活が、いっそう楽しく、充実したものとなるように、身近なものの観察と、身につく経験を主体に、やさしく編集しました。

●大型、タテ綴じワイド判です。
扱いやすく、広い画面ですから、各頁とものびのびと楽しむことができます。新鮮で、画期的な夏休み帳です。

★付録
「**やってみましょう**」豪華版の別冊で、水遊び、音遊び、パノラマつくりなど、夏の楽しい遊びを紹介しています。
「**なつのせいかつ**」ことしも記録しやすいノート式です。

最寄りの弊社代理店・支店・出張所へお申し込みください。　株式会社 フレーベル館

いまは
絵をみるだけでもいいのです

新刊!!
ドツパンの
絵物語

ジャングル・ブック　こじき王子　火の鳥
トム・ソーヤーの冒険以下続刊 ———
定価・380円
雄大なロマンの世界や勇気ある物語が、つよい感動の波となって、幼い心に伝わってゆくでしょう。
幼少年むき・園児におすすめください ● 有名デパート・書店またはフレーベル館にてお求めください。
株式会社 フレーベル館

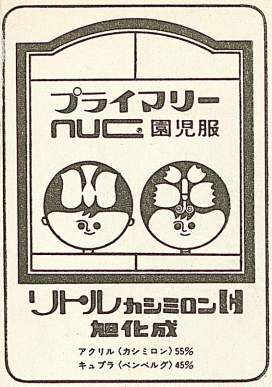
今月の
幼児のための
紙芝居です

㈱ 教育画劇
東京渋谷千駄谷5－17－15
TEL(341)3400・3227・1458
振替　東京　29855

たのしい生活シリーズ
みの虫のおとしもの　¥ 420円
画・加東てい象　みの虫さんのぬいだ着物がなくなりました。

ゆたかな心シリーズ
オレンジ色の森　¥ 420円
画・上柳輝彦　お誕生会の招待状が、アレアレ風にとんで…

名作紙芝居 12集
かちかち山　¥ 550円
画・前田松男　おなじみ悪だぬきとおじいさんと兎の物語



このラベルが目じるしです

科学された園児服が生まれました

とんだり、はねたり、走ったり、園児の生活リズムはいつも活発。そして、園児特有の体型や心の動き。こうしたことを科学的に考え、調べ、園児服のデザインやサイズに生かしたのがリトルカシミロンＮＵＣ園児服です。いままでにない、まったく新しい園児服です。

素材も科学しました

素材はリトルカシミロン。よごれても平気なＷ＆Ｗ性、軽くて肌ざわりがソフトで、しかも丈夫。のびざかりせんいとしてこどものために企画した素材です。楽しいデザインが８種類。色も園児にふさわしいかわいい色をとりいれました。こんなに細かく気をくばった園児服は初めて。

先生がたへ——→
新しい園児服ができました

リトルカシミロンH
NUC（ナック®）園児服

旭化成

0
16

発売 株式会社 フレーベル館
くわしくは弊社のセールスマンにおたずねください。